

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

沖縄県石垣市宮良

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2022-05-13<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15084/00003558">https://doi.org/10.15084/00003558</a>           |

# 沖縄県石垣市宮良\*

荻野千砂子  
福岡教育大学

## 1. 地域の概要

### 1.1 宮良集落の地理的概要

八重山地方の中心は石垣市である。石垣市は石垣島全体から成っている。石垣島の面積は 229.34 km<sup>2</sup>で、沖縄県で 3 番目に大きな島である。2021 (令和 3) 年 7 月現在の石垣市の人口は 49,079 名で<sup>1</sup>、大多数の人が、島の南側の四箇字(石垣・登野城・大川・新川の四地域を指す)に居住している。宮良集落は、四箇字から東へ 8 km ほど離れたところの宮良川河口東の台地にある。北緯 24 度 20 分 58 秒、東経 124 度 13 分 24 秒に位置する(宮良村誌: 11)。現在の場所に定着したのは、明治 7 年に未曾有の台風被害にあった後で、それまでは海岸沿いに村があったという(宮良村誌: 11)。主たる産業は、昔は農業であったが、現在は畜産業に変わっている。

### 1.2 方言話者人口の推定

本稿を作成するにあたり、A 氏(昭和 15 年生)、B 氏(昭和 23 年生)、C 氏(昭和 23 年生)、D 氏(昭和 27 年生)、E 氏(昭和 27 年生)の 5 人の男性話者に調査協力を得た。全員、時折共通語の語彙を用いながらも、宮良方言で日常会話をするができる。

Davis (2014) は、集落在住の方言話者人口を 500 人前後だと推定しているが(2010 年の段階)<sup>2</sup>、おそらく当時において、500 人もいなかったのではないかと思われる。戦後生まれでは、特に女性が話せなくなっていることに注意を向ける必要がある。A 氏のような戦前生まれの世代では、男女とも方言で日常会話を話せるが、B 氏や C 氏のように戦後すぐ生まれた世代では、方言で話せる女性が半数以下になると言う。D 氏と E 氏(昭和 27 年生)の幼少期は、小学校でも家庭内でも方言を使用しなかった世代である。D 氏と E 氏が方言で日常会話を話し始めたのは、中学生になってからだそうだ。学校生活において男友達とは方言で話す、女性と方言で話すことはなく、方言で日常会話ができる女性は少なかったという<sup>3</sup>。宮良集落では、伝統的な行事である豊年祭において、男性は方言で話すことを奨励されており、八重山の中で方言の継承が保たれている地域である。それでも、話せない人の割合は増えている。

\* 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「危機言語・方言」と、文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」と、JSPS 科研費 JP20K00547 の研究助成を受けている。最後に、貴重な方言を教えてくださいました宮良方言話者の皆様に、心からの感謝を申し上げます。

<sup>1</sup> 石垣市 HP, 住民基本台帳人口移動詳細表による。石垣市の人口(住民基本台帳人口移動詳細表)／石垣市 (city.ishigaki.okinawa.jp) 2021 年 9 月 10 日閲覧

<sup>2</sup> 2010 年時点で、宮良地区の 50 歳から 69 歳までの約半数を方言話者とし(221 名)、70 歳以上の全員(326 人)を方言話者とし、合計で約 500 人としている。2021 年の現時点では、60 歳以上の半数が方言話者に該当することになるが、現在の状況から判断する限り、男性でも 65 歳以上を話者とする方がよさそうだ。

<sup>3</sup> 二人の言葉を借りると、「格好つけて方言を話し始めた」そうである。この学年が 68 名で最も多い世代である。男性はほぼ方言が話せるが、方言が話せる女性は 4.5 人程度だということである。

行政区としての宮良地区は、宮良集落から於茂登トンネルまで、石垣島を縦割りにしたような細長い地区であり、この地区には、宮良集落だけでなく、県営住宅の団地やホテル等が含まれている。宮良集落外の人たちは、外部からの移住者が多く、宮良方言を話すことはない。行政区としての宮良地区の人口は、2021年9月現在、1,792名である<sup>4</sup>。現在の方言話者の人口を、次のように推定した<sup>5</sup>。

- 1) 65歳以上の男性全員と75歳以上の女性全員 (292名)
- 2) 70歳～74歳の女性の二分の一 (26名)
- 3) 65歳～69歳の女性の五分の一 (10名)

以上を合計すると、多く見積もっても300名程度ではないかと推定する。

### 1.3 宮良方言の系統

八重山方言は南琉球語に属する。八重山方言の区画については、ローレンス (2000) の報告が参考になるが、宮良方言については記載がない。宮良方言は、石垣方言と異なると言われる。石垣方言とは石垣市の中心部で話されている方言で、四箇 (字) 方言と呼ばれている。宮良方言が石垣方言と異なった最大の理由は、小浜島からの移住によるものだと考えられる。約200年前の1771年に大地震が起こり、明和の大津波が宮良村を襲い、甚大な被害が出た。津波前の人口1,221名に対し、1,050名が溺死し、生存者は171名だったと言う<sup>6</sup>。壊滅的な被害からの復興として小浜島からの強制移住が計画され、320名が移住したとの記録がある。以上のような経緯があるため、伊豆山 (2002a) では「宮良方言は、基本的には小浜島と同系である (伊豆山 2002a: 343)」という指摘がある。これに対し、Davis (2014) は「古くから使われていた「元宮良言葉」 (mutu me:ra muni) と小浜島の移住者が持ってきた言葉と地理的に近い四箇方言とか混ざっていると考えられるが、今のところはそれを解明する研究はされていない (Davis 2014: 93)」と指摘する。

さて、この「元宮良言葉」についてであるが、話者のA氏は、「元宮良」 (mutu me:ra) という言い方はするが、「元宮良言葉」 (mutu me:ra muni) という語は聞いたことがなく、mutu noora muni (元名蔵言葉) のことではないかと話す。元名蔵言葉は、津波の被害を受ける前に、集落に居住していた人たちが話していた言葉ではないかとされている。「宮良村」の名称が文献上に初めて見られるのは慶長の検地 (1611年) であるとされる (宮良村誌: 12)<sup>7</sup>。しかし、宮良村の創設時期はこの検地より早いらしい。インナーラとアンナーラという二兄弟を指導者として、創始されたという伝承がある。インナーラが宮良村を、アンナーラが白保村を創始したので、元の宮良村と元の白保村は兄弟村であったとされる。その時期は14世紀頃で、中世期に血縁、地縁の農業

<sup>4</sup> 2021年9月30日現在。石垣市市民課、行政区別年齢別統計表による。

<sup>5</sup> 2021年10月、宮良公民館主催の敬老会があり、85歳以上の92名が祝賀を受けた。石垣市行政区別年齢別統計表での85歳以上の人口は113名であり (2021年9月現在)、宮良集落に居住している人の割合は約8割である。年齢が若い人ほど、集落外の団地等に居住している可能性が高いことが推測できるのだが、今回、65歳～84歳も、宮良集落居住者の割合を8割と仮定して、計算した。

<sup>6</sup> 八重山歴史編集委員会編 (1954) 『八重山歴史』 p.269 参照。表の数値は、「大波揚候次第」という記録によったことが付記として記載されている。津波に関しては複数の文献があり、数値が異なるようだが、八重山全体で9,000人～9,500人ほどの溺死者がいたとされる。

<sup>7</sup> 「先島両絵図帳」に宮良と白保の両村の名称が見られるとの指摘があるが (宮良村誌)、筆者は未見である。

共同体として、村が創始されたのではないかと推測されている（宮良村誌: 21）<sup>8</sup>。あくまで想像の域を越えることはないが、「元名蔵言葉」とは、石垣四箇字方言とは異なる、周辺部の石垣方言の一つであったとすることができようか。「元名蔵言葉」は大切に思われていたらしく、明和の津波の後も、明治期ごろまで特定の家系に伝わっていたらしい。現在の話者も、アクセントやイントネーションが異なっていたとことを知っている。とはいえ、「元名蔵言葉」（*mutu noora muni*）として、現在の話者に意識されているのは音声的側面であり、語彙や文法ではない。

また、どの話者も現在の宮良方言は「小浜方言と異なる」と認識し、小浜方言とは相互理解ができない状況だという。そこで、語彙の面では、どの系統が見られるか、一部だけでも明らかにできないかと考え、基礎語彙の一つである親族名称を調査した（荻野 2021）。親族名称の調査をしていると、回答のあとに「これは石垣の士族のことばだ」や「農民のことばだ」や「自分は「小浜流れ」だ」のように説明が加えられることが多く、「長兄」「次兄」「三兄」に相当する語彙は、話者ごとに異なることが分かった。つまり、石垣の士族階級の語や平民（農民）階級の語や小浜方言からの語彙が、混在した状態で宮良方言として受容されており、統一された語彙はなかった。このことは、基礎語彙を収集する際に留意する必要がある、一人の話者から採取される、一つの語彙だけでは不十分になる可能性を示唆している。また、文法面の調査結果を分析するときには、個々の話者から得たデータを記述すると同時に、最大公約数的な観点から分析することが必要になる可能性も出てくるのではないかと考える。

## 2. 音韻論

### 2.1 音素目録

宮良方言の音素に関して、仲原（2003, 2005）や Davis（2015, 2016）がある。母音と半母音と特殊拍音素に関して同じ見解を持つ。特殊拍の /Q/ は促音、/N/ は撥音、/R/ は長音を示す。母音を表 1 に、子音を表 2 に示す。表では音素記号の // を省略する。

本稿での用例の表記は、中舌の [i] は /I/ とし、[tɕ] は /c/ とし、特殊拍の促音は子音を重ね、撥音は N とし、長音は母音を重ねて表すこととする。また、接語境界を=、接辞境界を-、複合境界を+、を用いて表すこととする。[k] や [s] は、母音 /i/ の前では口蓋化が起こるので、[kʲi] や [sʲi] となるが、非口蓋化音と対立はしないので、/ki/ や /si/ で表す。なお、/ɸu/ と /hu/ の対立はないため、/ɸu/ の表記は、屈折がない自立語と屈折がある自立語の語根までとし、屈折に関わる部分は /hu/ で表記することにした。

母音音素 /i, I, e, a, o, u/

半母音音素 /j, w/

子音音素 /ɸ, p, b, t, d, k, g, n, m, s, z, ts, h, r/

特殊拍音素 /Q, N, R/

<sup>8</sup> 二人は、群雄割拠時代のアジ・カワラに相当する人物だったのではないかと推測がなされている。

表1 母音

|   | 前舌    | 奥舌    |
|---|-------|-------|
| 狭 | i [i] | ɪ [ɪ] |
|   | e [e] | o [o] |
| 広 |       | a [a] |

表2 子音

|       | 両唇音   | 歯茎音      | 硬口蓋音  | 軟口蓋音  | 声門音   |
|-------|-------|----------|-------|-------|-------|
| 無声破裂音 | p [p] | t [t]    |       | k [k] |       |
| 有声破裂音 | b [b] | d [d]    |       | g [g] |       |
| 無声破擦音 |       | ts [ts]  |       |       |       |
| 無声摩擦音 | ɸ [ɸ] | s [s]    |       |       | h [h] |
| 有声摩擦音 |       | z [dz~z] |       |       |       |
| 鼻音    | m [m] | n [n]    |       |       |       |
| 弾き音   |       | r [ɾ]    |       |       |       |
| 接近音   | w [w] |          | j [j] |       |       |

### 2.1.1 母音音素

母音音素は、/i, ɪ, e, a, o, u/ の6つである。/ɪ/ は、いわゆる中舌母音と呼ばれている母音である。伊豆山 (1999a) は、「中舌母音」と呼ばれている /ɪ/ に関して、次のような注意点を述べる (伊豆山 1999a: 113)。

これは、少なくとも宮古・八重山では「中舌」母音ではない。緊張度の高い、張唇前舌狭母音である。舌尖に近い部分が歯茎に向かって調音する。その直前の子音は口蓋化しない。[k] [g]<sup>9</sup>では筆者 (東京方言話者) のそれより、調音位置が奥である。唇音では、唇が内側に入るような形で張り、閉鎖は弱い。特に無声音では、[ɸ] に移りそうな音である。母音の調音位置が [s] の位置に近いので、無声子音の直後では渡り音として [s] が聞こえる。これは、この母音をもたない方言話者にとっては極めて特徴的に響くようである。

確かに、/ɪ/ は、唇を横に広げて緊張させ、前舌よりで発声する。また、Davis (2016) は、/ɪ/ が「オンセットのない音節の核にはなりえないようである」と述べ、「中舌母音そのものが「母音」ではなく一種の摩擦音ではないか」と疑問を呈している。今後の研究を期待したい。

<sup>9</sup> 筆者注：音声記号[g]の代わりに、当該論文では[ɣ]を用いている。

また、伊豆山 (2002a) では、/l/ が現れる音節は「音韻論的には、子音の口蓋化・非口蓋化の対立だと考えられ」と述べ、[b, p, (m), s, z, ts, k, g] で対立があるが、[h, t, d, n] では対立がないことを指摘する。確かに子音 [b, p, (m), s, z, ts, k, g] は口蓋化可能ではあるが、それと /l/ が現れる音節と、どう関係があるのかが不明である。また、/sI/~/su/, /tsI/~/tsu/, /zI/~/zu/, /kI/~/ku/, /gI/~/gu/ では発音が揺れることが多い。音素として /sI/ や /tsI/ が消えかかっている可能性もあるが、話者によっては、「島」は /sI<sub>ma</sub>/, 「角」は /tsu<sub>nu</sub>/ など、揺れない語もある。音節構造も関係するが、「血」は /tsII/, 「地面」は /zII/ で、全く揺れない語もある。加えて、強変化動詞の語幹末母音では /l/ と /u/ の区別が明確であることが多い。よって、音素としての対立はあるが、特に名詞で揺れることが多く、音韻的な弁別を失いつつある状況ではないかと考える。ちなみに、伊豆山 (2002a) では、[m] は「最高齢者が mII (巳) だけを持つ」と述べており、現在は /mI/ がほぼ消滅しているかのように見えるが、動詞の禁止形では *nim-I<sub>na</sub>* (寝るな) があり、現在でも /mI/ と /mi/ の音素対立を確かめることができる。

共通語の短母音の /e, o/ は、宮良方言では /i, u/ に対応している。仲原 (2003) には、(1) の例があげられており、実際に確かめた。

- (1) a. /e/ → /i/  
 「エ」 [ʔi<sub>bi</sub>] (エビ), [ʔi<sub>rabu</sub>N] (選ぶ), [kui] (声)  
 b. /o/ → /u/  
 「オ」 [ʔu<sub>tu</sub>] (音), [ʔu<sub>bi</sub>] (帯) (仲原 2003 より引用)

次に、長母音であるが、長母音は (2) の通り、すべての母音で生じている。

- (2) a. /ii/ (mii : 目)  
 b. /ee/ (heeruN : 入る)  
 c. /aa/ (aa : 粟)  
 d. /oo/ (noo : 何)  
 e. /uu/ (tuu : 十)  
 f. /II/ (tsII : 血)

また、二重母音については、Davis (2016) の表 3 に、(3) の例があげられている。(3d) の /ao/ の用例が /aoori/ となっているが、/aori/ の誤植であろうと考え、本稿で修正した。また、Davis (2016) では、/ii/ の例として /kiNki-iru/ (黄色い) をあげるが、この語は形態素境界を含むため、二重母音と言えるか疑問である。一つの形態素内で /ii/ の二重母音は管見のところ見られない。よって、/ii/ は省くことにした。

- (3) a. /ai/ (ai : けんか)

- b. /ui/ (kui : 声)
- c. /au/ (auda : 蛙)
- d. /ao/ (aori : 難儀)<sup>10</sup>
- e. /oi/ (oisumunu : 贈り物)
- f. /ui/ (φuiruN : 震える) (Davis 2016, 表 3 を一部改変)

### 2.1.2 子音音素

Davis (2015) は子音音素に関して、仲原 (2003) とは異なり、声門破裂音を音素として立てないことと、/φ/ を音素として立てることを主張した。確かに、語頭の母音の前には声門破裂音が音声的に出ることがあるが、弁別的な意味の違いはない。そのため、これらの点に関して Davis (2015) に従うこととした。ただし、/φo/ は [φo~ho] で実現し、ゆっくり発音してもらおうと [ho] となり、音韻的な対立を失っている。

また、/kak-u-ka/ (書くなら) が音声的に [kak-u-Ka] (K は無気音) となったり、/kak-i-ta/ (書いた) が音声的に [kak-i-Ta] (T は無気音) で現れたりする。この場合の K, T は促音のように聞こえるが、促音では 2 モーラが必要となるのに対し、話者に [kak-i-Ta] をゆっくり発音してもらおうと、「カキタ」(1 モーラ) となったり、「カキッタ」(2 モーラ) になったりする。現時点では、音声的な現象で音韻的区別はないと考え、音素として扱わないことにする。

また、漢字音には合拗音の /k<sup>w</sup>a/, /g<sup>w</sup>a/ も見られる。[k<sup>w</sup>a:si] (菓子) は、話者 A 氏, B 氏, C 氏は日常的に用いるが、D 氏と E 氏は用いず、[ka:si] (菓子) と直音で発音する。また、/g<sup>w</sup>a/ は [gung<sup>w</sup>azi] (五月) のような例であるが、現在、日常的に /g<sup>w</sup>a/ で発音する話者はおらず、/ga/ で発音する。/g<sup>w</sup>a/ とも言えるという程度の認識で、音声として消失しつつある。

## 2.2 音節構造とモーラ

基本的な音節構造は (C(C))(G)(V1)(V2)(M) で、(4) のような構造を持つ。それに加えて、成節的な鼻音もあるため、鼻音が音節の核となる (5) のような M(M) の音節構造もある。C が子音、G が半母音、V が母音、M が撥音・促音の特殊拍である。長母音は VV と表す。この 2.2 節では音節の区切りを「.」の記号で表す。成節鼻音で始まる (5) は、語頭が [m] か [n] かで、話者が音声的に異なると判断したため、今回は分けて記述するが、音素として区別があるかは、今後の課題である。軟口蓋鼻音 [ŋ] で始まる語もあるが (例: Nkoor-uN (召し上がる))、語頭の歯茎鼻音 [n] と軟口蓋鼻音 [ŋ] は、音素としての区別はなさそうである。

#### (4) 語頭が成節鼻音以外の場合の語頭音節の種類

- a. V /a.ka.rI/ (明かり V.CV.CV)
- b. VV /aa/ (粟 VV)

<sup>10</sup> aori は、awari とも言い、「苦勞」や「苦難」の意味がある。

- c. VM /iN/ (犬 VM)
- d. CV /na.da/ (涙 CV.CV)
- e. GV /ja.ma/ (山 GV.CV)
- f. CVM /kok.kii/ (ご馳走 CVM.CVV)
- g. CGV /sju.wa/ (心配 CGV. GV)
- h. CGVM /kjoN.giN/ (狂言 CGVM.CVM)
- i. CVV /saa.go/ (咳 CVV.CV)
- j. CGVV /sjoo.ku.tu/ (本当のこと CGVV .CV.CV)  
/k<sup>w</sup>aa.sI/ (菓子 CGVV.CV)
- k. CGVVM /kjaaN.gi/ (いぬまきの木 CGVVM.CV)
- l. CCV /ssI.sai/ (白髪 CCV.CVV)
- m. CCVM /ssaN/ (虱 CCVM)

(5) 語頭が成節鼻音である場合の語頭音節の種類

- a. M /m.ma/ (馬 M.CV)
- b. M /n.ta/ (土 M.CV)
- c. MM /nn.tsI/ (六つ MM.CV)
- d. MM /nt.taa.ru/ (六人 MM.CVV.CV)

## 2.3 アクセント

宮良方言のアクセントに関しては、平山（1967）に名詞と動詞のアクセントの記述がある。また、近年では、セリック・麻生・中澤（2021）の報告がある。平山（1967）は結論として「過去の小浜方言のそれを伝えているもので、現在の小浜方言のような現象を起こす以前のおもかげを伝えるものであろう」と指摘している（平山 1967: 41）。これは、小浜方言アクセントと同系性を指摘したものと言える。この 2.3 節では、モーラの切れ目に「.」の記号を用いることとする。

### 2.3.1 名詞アクセント

平山（1967）で提示する用例を、単語単独と 1 モーラ助詞がついた形式に簡略化し、ピッチの上昇を [ で、下降を ] で示し、無声母音とされている記号は ! に置き換えて示す。2 モーラ名詞を見ると、いわゆる金田一語類の 1・2 類が、(6a)~(6c) のように頭高型で、3・4・5 類が (6d) や (6e) のように低平型になると指摘されている<sup>11</sup>。3 モーラ名詞を見ると、頭高・中高型 (1・2・3 類に多い) となる (7a)~(7d) の例と (ちなみに (7c) のような 1 モーラ目が無声化する頭高型は尾高型になるとする)、低平型 (4・5・6・7 類に多い) になる (7e) や (8f) の例が示されて

<sup>11</sup> 1 類~5 類とは、いわゆる「金田一語類」（金田一 1974）による二拍名詞アクセントの類別である。平安時代末期の京都アクセントは、相対的に高い拍を●、低い拍を○、下降を含む拍を●とすると、第 1 類「●●」、第 2 類「●○」、第 3 類「○○」、第 4 類「○●」、第 5 類「○●」であったと分類されている。



いる（3 モーラ名詞に助詞がついた例は記載されていない）。これらの例から見る限り、アクセント体系として、二つの型の対立があることになる。

(6) 2 モーラ名詞 （平山 1967 の用例を一部改変<sup>12</sup>）

- |    |         |   |             |    |
|----|---------|---|-------------|----|
| a. | u].sI   | 牛 | u].sI.nu    | 牛が |
| b. | pa].na  | 鼻 | pa].na.nu   | 鼻が |
| c. | p!a.[ta | 旗 | p!a.[ta].nu | 旗が |
| d. | ja.ma   | 山 | ja.ma.nu    | 山が |
| e. | ha.na   | 花 | ha.na.nu    | 花が |

(7) 3 モーラ名詞 （平山 1967 の用例を一部改変）

- |    |             |     |
|----|-------------|-----|
| a. | ?a].ku.bI   | 欠伸  |
| b. | pa].na.tsI  | 鼻血  |
| c. | F!u.[ta].i  | ひたい |
| d. | s!I.[ka].ra | 力   |
| e. | ta.ka.ra    | 宝   |
| f. | ma.φ.φa     | 枕   |

セリック・麻生・中澤（2021）でも、二つの型の対立があるアクセントであることを指摘する。だが、平山（1967）とは下降の位置が異なり、「第一のパターンでは、2 拍目の直後に大幅なピッチの下降が実現する。第二のパターンでは、ピッチの変動がほとんどなく文節全体が平たく発音される」とした。高を●、低を○で表すと、この分析では1 モーラ目で下がる（6a）や（7a）の●○○のパターンについては触れられていない。今回、調査した範囲でも、●○○のパターンは見られなかった。「牛が：●●○」，「鼻が：●●○」，「鼻血：●●○」のように、2 モーラ目の後で下降が見られる。この下がり目の位置の違いは、平山（1967）の頃と比べて、アクセントが変化したのか、別の要因があるのか、現時点では不明である。

### 2.3.2 三型アクセント

服部（1979）は、金田一の類別語彙では説明できないアクセントの体系が、琉球語に見られることを指摘した。近年になって、琉球語は三型アクセント体系を持つという発見が相次いでいる（松森 2010, 五十嵐 2016 など）。松森（2016）は、八重山地方の竹富町黒島方言に三型アクセントが見られることを指摘した。また、松森（2015）は、八重山の西表島古見方言では、普通名詞は A 型と BC 型の二つの型の対立しかないが、地名名詞で韻律句単位を導入すると、三つの型のアクセントが現れると指摘した。宮良方言では、普通名詞では、(8)のように A 型と BC 型で二つの型の対立があった（前述の平山 1967 の頭高型が A 型で、低平型が BC 型に対応する）。そこ

<sup>12</sup> 母音の無声化が、アクセントに関係すると考察されているが、現在の話者では、/a/ の無声化がほぼ見られず、音韻的に弁別されているのか不明である。

で、松森 (2015, 2016) の地名名詞を参考にして、地名名詞を先頭にした二韻律句を形成して調査を行った。その結果、(9) のように三つの型のアクセント対立が現れた。

A 型は、一つ目の韻律句が 3 モーラの場合、2 モーラ目に下降がある。一つ目の韻律句が 4 モーラ以上の場合、前から 2 モーラ目で下降する場合と後ろから 1 モーラで下降する場合とで揺れが見られる。大切なのは、一つ目の韻律句内で下降があることであり、下降の位置が後ろにずれても問題にならないようだ。B 型は、二つの韻律句ともに低平型である。C 型は一つ目の韻律句は高平で、二つ目の韻律句で下降が見られる。A 型と C 型の下降は、下降の速さが異なっていて、A 型が一つ目の韻律句内で急激な下降が生じるのに対し、C 型は二つ目の韻律句全体で緩やかに下降をしており、トーンアクセントの諸相を見せる<sup>13</sup>。例えば、二つ目の韻律句が *muni* (言葉) の場合、聞き方によっては /*mu.ni*/ の /*mu*/ から下降が始まっているようにも聞こえる。これを緩やかな下降と呼び、二つ目の韻律句の 1 モーラ目の後に ↓ で表すことにする。

また、B 型では、時折、二つ目の韻律句が緩やかに下がることがあり、そうすると B 型と C 型のアクセントが同じになる。その場合に、二つ目の韻律句を低平型で言えるか確かめると、低平型で言うことができる。一方、C 型で二つ目の韻律句は低平型で言うことは許されない。二つ目の韻律句内で緩やかな下降が必須となる。従って、地名名詞で始まる二つの韻律句の場合には、現在でも B 型と C 型の違いが保たれていると考えられる<sup>14</sup>。

(8) 地名名詞単独のアクセント

|    |                    |     |      |
|----|--------------------|-----|------|
| a. | <i>me.e].gu</i>    | 宮古  | A 型  |
| b. | <i>i.ri].mu.ti</i> | 西表  | A 型  |
| c. | <i>ku.mo].o.ma</i> | 小浜  | A 型  |
| d. | <i>ja.ma.du</i>    | 大和  | BC 型 |
| e. | <i>u.kI.na.a</i>   | 沖縄  | BC 型 |
| f. | <i>ha.tu.ma</i>    | 鳩間  | BC 型 |
| g. | <i>ta.ra.ma</i>    | 多良間 | BC 型 |

(9) 地名名詞から始まる、二つの韻律句で現れるアクセント

|    |                    |                                  |       |     |
|----|--------------------|----------------------------------|-------|-----|
| a. | <i>me.e].gu</i>    | <i>mu.ni</i>                     | 宮古言葉  | A 型 |
| b. | <i>i.ri].mu.ti</i> | <i>mu.ni ~i.ri.mu].ti mu.ni</i>  | 西表言葉  | A 型 |
| c. | <i>ku.mo].o.ma</i> | <i>mu.ni ~ ku.mo.o].ma mu.ni</i> | 小浜言葉  | A 型 |
| d. | <i>ja.ma.du</i>    | <i>mu.ni</i>                     | 大和言葉  | B 型 |
| e. | <i>u.kI.na.a</i>   | <i>mu.ni</i>                     | 沖縄言葉  | B 型 |
| f. | <i>ha.tu.ma</i>    | <i>mu↓.ni</i>                    | 鳩間言葉  | C 型 |
| g. | <i>ta.ra.ma</i>    | <i>mu↓.ni</i>                    | 多良間言葉 | C 型 |

<sup>13</sup> 南琉球語には、二つ目の韻律句全体で緩やかな下降が生じるアクセントが存在することを、セリック氏より私信にてご教示いただいた。

<sup>14</sup> このときのアクセント調査の話者は、小浜島に由来を持つ家系の方ではない。

A 型：一つ目の韻律句に下降が見られる（急激な下降）。

B 型：下降がない。

C 型：二つ目の韻律句に下降が見られる（緩やかな下降）。

### 2.3.3 複合名詞アクセント

複合名詞のアクセントと例外的な複合名詞アクセントについて述べる。(10a) の「米」は A 型アクセントで、(10b) の「麦」は BC 型のアクセントである。これらを、(10c) の「俵」(BC 型アクセント) に続ける。「米」で始めると、(10d) 「米俵」のように 2 モーラ目に下降が見られる。よって、A 型アクセントと言える。「麦」で始めると、(10e) 「麦俵」のように低平型となる。よって、BC 型アクセントと言える。以上より、複合名詞は、前部要素のアクセント型で実現すると言える。

- (10) a. ma].i            米    A 型  
      b. mu.N           麦    BC 型  
      c. ta.a.ra        俵    BC 型  
      d. ma.i]+da.a.ra   米俵   A 型  
      e. mu.N+da.a.ra   麦俵   BC 型

だが、親族名称のアクセントに関して、この法則に当てはまらない現象が見られた。親族名称の naka-cca (次兄) や、naka-Nma (次姉) は、次子を表す形態素 naka (中) を前部要素とする語である。naka (中) 単独と、naka=ba mi-ida (中を見た) の「中を」のアクセントは、(11) のように下降が見られた。よって、naka (中) は A 型の候補と言える<sup>15</sup>。

- (11) na].ka    中                    na.ka].ba    中を

「次兄」と「次姉」は複合名詞で、naka が A 型候補のため、前部要素の 2 モーラ目の naka- で下降が生じ、×naka]-cca や×naka]-Nma のように急激な下降が生じるはずである（以下、使用できない形態や出現しない形態の直前に×印を付す）。だが、実際は、(12) のように後部要素で緩やかな下降が見られた（荻野 2020a）。

- (12) a. na.ka.N↓.ma    次姉                    na.ka.N↓.ma.nu    次姉が  
      b. na.ka.bu↓.zja.a   二番目おじ            na.ka.bu↓.zja.a.nu   二番目おじが

<sup>15</sup> 別の話者は「中を見た」では、A 型と BC 型の二つのアクセントが出たため、揺れている可能性もある。

ミニマル・ペアに近い語として、A型の複合名詞 *aka+Nma* (赤馬, 茶色の馬) と *naka-Nma* (次姉) のピッチ曲線を見て見ると、*aka+Nma* (赤馬)<sup>16</sup>の /N/ では急激な下降が見られるが(図1), *naka-Nma* (次姉) の /N/ では、緩やかな下降となっているのが分かる(図2)<sup>17</sup>。

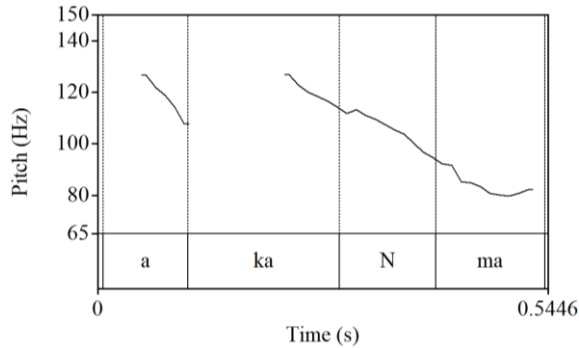


図1 *aka-Nma* (赤馬) のピッチ

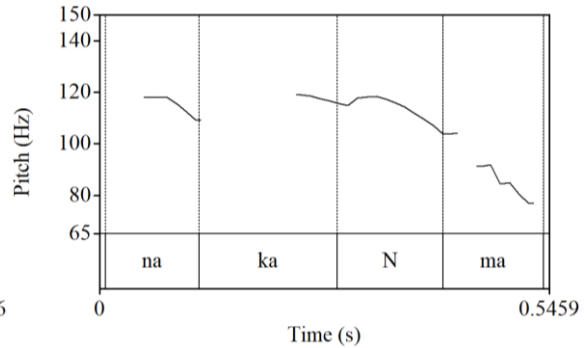


図2 *naka-Nma* (次姉) のピッチ

これは、*naka* (中) は歴史的にはC型であったためではないかと考える<sup>18</sup>。*naka-cca* (次兄) と *naka-Nma* (次姉) は、それぞれ *naka-*と *-cca*, *naka-*と *-Nma* の二つの形態素から成ると考えられる。元々、*-cca* は、兄を表す *\*acca*, *-Nma* は、姉を表す *\*aNma* であったと推定できる<sup>19</sup>。そうすると、*\*naka-acca* や *\*naka-aNma* となり、二つの韻律句を形成していたのだろう。地名名詞のC型では、二つ目の韻律句内に緩やかな下降が見られた。同様に *naka* を含む親族名称は、(13) のような変化を遂げ、現在、一語化した語彙として残存しているのではないかと考える。

(13) *\*(na.ka a↓.N.ma) > na.ka.N↓.ma* (次姉)

ちなみに、親族名称以外の「中」を前部要素とする複合名詞は、(14) のように平らになる。「中柱」(家の中心となる柱)、「中骨」(動物などの背骨)、「中道」(集落中心の道)のアクセントは、単独名詞でも、1モーラ助詞をつけた *X=nu mir-ariN* (Xが見える) の *X=nu* の場合も平らである。

(14) a. *na.ka.ba.ra.a* 中柱      *na.ka.ba.ra.a.nu* 中柱が  
 b. *na.ka.bu.ni* 中骨      *na.ka.bu.ni.nu* 中骨が  
 c. *na.ka.mi.tsI* 中道      *na.ka.mi.tsI.nu* 中道が

<sup>16</sup> 宮良の伝承に名馬の「赤馬」の話があるが、固有名詞の「赤馬」は低平型となる。

<sup>17</sup> 新型コロナウイルスの影響で対面調査ができないため、図1, 図2とも、電話で調査し、スマートフォンからスピーカーにつないで出力した音声である。

<sup>18</sup> 竹富町の黒島方言では、*naha* (中) がC型となる。

<sup>19</sup> 竹富町の西表方言には、*accaa* (兄) と、*aNma* (姉) がある。

よって、共時的な複合名詞のアクセントは BC 型で出現すると考えられる。

## 2.4 歴史的な音韻対応

琉球諸語に残存する古代日本語の特徴の一つに、語頭のア行音と語頭のワ行音の音韻的区別がある。ペラール (2016) では、語頭がア行の「入れる」「選ぶ」「降りる」と、語頭がワ行の「居る」「酔う」「折る」が音韻的区別を示すことを指摘する。また、語頭がア行のエの「海老」と、語頭がヤ行のエの「柄」も音韻的区別があるとする (ペラール 2016: 106)。そこで、これらの語彙を参考にして、(15a)~(15d) のように宮良方言での語彙をあげる。

- |         |            |           |               |              |
|---------|------------|-----------|---------------|--------------|
| (15) a. | ア行の「イ」：入れる | /jiriruN/ | ワ行の「キ」：居る     | /biruN/ (座る) |
| b.      | ア行の「エ」：選ぶ  | /jrabuN/  | ワ行の「エ」：酔う     | /bjiruN/     |
| c.      | ア行の「オ」：降りる | /uriruN/  | ワ行の「ヲ」：折る     | /buruN/      |
| d.      | ア行の「エ」：海老  | /jɪ/      | ヤ行の「エ (イエ)」：柄 | /ju/         |

ア行の「イとエ」は宮良方言では /i/ となり、ワ行の「キとエ」は /bi/ となっている。ア行の「オ」は宮良方言では /u/ となり、はワ行の「ヲ」は /bu/ となっている。ア行とワ行で音韻的区別があると言える。ただし、ワ行の「ヲ」に関しては、例外がある。古典語の存在動詞「をる」に対応する宮良方言は、/ur-uN/ (いる) であり、×bur-uN ではない。だが、(15c) 「折る」以外にも、「尾 (ヲ)」が /buu/, 「苧 (ヲ)」が /buu/ となっており、ワ行音は b 音で実現しているため、存在動詞の /ur-uN/ は例外的であると考えられる。また、ヤ行の「エ」に関しては、(15d) 以外にも、(16a) のように「枝 (エダ)」が /juda/ となっており、ヤ行の「エ」は、宮良方言では /ju/ で対応しているのではないかと考えられる。そうすると、他にもヤ行の「エ」だったと考えられる語をある。通常、古語辞書では、ア行の「エ」の項に記載されている語彙として、「烏帽子 (えぼし)」がある。これに対して、宮良方言には (16b) のように /jubusi uja/ という語がある。この語は烏帽子親が語源ではないかと言われている。もし、「烏帽子」が語源だとすると、/ju/ で対応しているため、「エボシ」の「エ」はヤ行の「エ」であった可能性があるかもしれない。ただし、古典語と音韻関係がない語もあり、(17) の「絵 (エ)」はワ行のはずだが×bii ではなく、/ii/ である。そのため、あくまで可能性の一つとして記述することにする。

- |         |                               |               |
|---------|-------------------------------|---------------|
| (16) a. | ヤ行のエ (イエ)：枝                   | /juda/        |
| b.      | ヤ行のエ (イエ) の候補：親のように頼りにする人、保証人 | /jubɪsɪ uja/  |
| (17)    | 古典語と音韻対応がない語                  |               |
|         | ワ行の「エ」                        | : 絵 /ii/ ×bii |

## 3. 名詞の形態論

### 3.1 名詞の内部構造

名詞に「は」相当の助詞 (=ja) が後接するとき, (18) のように名詞の語末音によって音声に変化することがある。伊豆山 (2002a) では, 語末母音が /I/ の場合, I=ja は a=a となることが指摘されている。確かに, 語末母音が /I/ で, そのひとつ前が広母音 /a/ であれば, (18d) のように /hara-a/ (針は) となる。しかし, 語末母音が /I/ で, 語末母音の一つ前の母音が, 非広母音の /i/ や /u/ や /I/ のときは, (18e)~(18g) のように I=ja は o=o となる。なお, =ja が後接するときに, いつも音声変化が起こるわけではなく, =ja が独立して発音されることも多い。また, 音声的な特徴であるが, 軟口蓋破裂音と中舌母音の /kI/ の場合, tsIkI=ja (月=は) は, tsIko=o よりも, tsIkI=o のように, /I/ の音声若干残って聞こえる。

- (18) a. a=ja → a=a (hana=ja) hana=a (花) 花は  
 b. i=ja → e=e (ami=ja) ame=e (雨) 雨は  
 c. u=ja → o=o (kImu=ja) kImo=o (心・肝) 心は・肝は  
 d. I=ja → a=a (harI=ja) hara=a (針) 針は  
 e. I=ja → o=o (izI=ja) izo=o (魚) 魚は  
 f. I=ja → o=o (usI=ja) uso=o (牛) 牛は  
 g. I=ja → o=o (tsIkI=ja) tsIko=o (月) 月は

なお, 音声融合が生じるのは, 語末の音節構造が CV の場合である。成節鼻音や長母音や二重母音など重音節で終わる語では音声融合が生じず, =ja となる。例えば, iN=ja (犬=は), jaa=ja (家=は), usai=ja (おかず=は) のように発音される。

### 3.1.1 単数と複数

複数を表す接辞として, -daa と -numee がある (表3)。-daa よりも -numee の方が丁寧な言い方であるという話者の内省がある。

表3 複数を表す接辞 (該当する形式がない場合は一で表す)

| 名詞種類         | 共通語訳  | 接辞-daa      | 接辞-numee      |
|--------------|-------|-------------|---------------|
| 固有名詞         | 太郎達   | taroo-daa   | taro-numee    |
| 普通名詞<br>(人間) | 先輩達   | sizja-daa   | sizja-numee   |
|              | お父さん達 | bigee-daa   | bigee-numee   |
|              | お婆さん達 | appaa-daa   | appaa-numee   |
|              | 子供達   | φaa-daa     | φaa-numee     |
|              | 男達    | bigiduN-daa | bigiduN-numee |
|              | 女達    | miiduN-daa  | miiduN-numee  |
|              | 友達    | dusI-daa    | dusI-numee    |

|               |     |   |           |
|---------------|-----|---|-----------|
| 普通名詞<br>(非人間) | 犬たち | — | iN-numee  |
|               | 牛たち | — | usI-numee |
|               | 魚たち | — | —         |

談話では sizja-numee (先輩たち), φaa-numee (子供たち) の方が, sizja-daa や φaa-daa よりもよく観察される。動物名詞でも iN-numee (犬たち) とは言えるが, iN-daa は言えない。

### 3.1.2 接辞

指小辞として -ama があり, 意味は「小さい, 可愛い」の場合と「少ない」の場合に分かれる (表 4)。指小辞は, 語末母音が /a/ であれば a-ama, /i/ であれば e-ema, /u/ であれば o-oma, /I/ であれば o-oma となる。形態音韻規則は, 名詞に=ja (は) が後接するときの法則と同じだと考える。

表 4 名詞に指小辞がついた場合の意味と形式

|     | 対象      | 名詞          |                   | 名詞+指小辞       |                        |
|-----|---------|-------------|-------------------|--------------|------------------------|
|     | 人物      | 弟妹          | utudu             | 末っ子          | utudo-oma              |
|     |         | 男の子 (小学生以下) | kooni             | 男の子 (幼稚園以下)  | koone-ema              |
|     |         | 女性          | bira              | 若い女性         | bira-ama               |
|     |         | —           | —                 | 可愛い子 (男女共通)  | kokkooma <sup>20</sup> |
|     |         | 次男          | nakacca           | 次男坊          | nakacca-ama            |
| 小さい | 動植物・物など | かぼちゃ        | kabuca            | 小さいかぼちゃ      | kabuca-ama             |
|     |         | 最後          | cibi              | 最後で小さいもの     | cibe-ema               |
|     |         | 亀           | kami              | 小亀           | kame-ema               |
|     |         | 箱           | haku              | 小箱           | hako-oma               |
|     |         | 瓜           | uurI              | 小さい瓜         | uuro-oma               |
|     |         | 魚           | izI               | 小さい魚         | izo-oma                |
|     |         | 家           | jaa               | 小さい家 (おもちゃ等) | jaa-nama               |
|     |         | 子 (人間も動物も)  | φaa               | 赤ちゃん         | φaa-nama               |
|     |         | さつま芋        | akkoN             | 小さいさつま芋      | akkoN-nama             |
| 鳥   | turI    | ひな/小鳥       | tuN-nama/turo-oma |              |                        |
| 少ない | 物       | おかず         | usai              | 量が少ないおかず     | usai-nama              |
|     |         | お酒          | gusi              | 少しのお酒        | gusje-ema              |
|     |         | 物           | munu              | 少しの食べ物・おかず   | munu-oma               |

<sup>20</sup> 元の名詞形式が分からず, 形態素の分析が不可能である。

語末の音節が、成節鼻音や長母音や二重母音では-*nama* となる。また、音便が生じることもあり、*turI* (鳥) では *tuN-nama* の形式もある。その場合、*tuN-nama* は幼鳥を指し、*turo-oma* は可愛い小鳥を指すというように、意味の違いを感じる話者もいる。また、指小辞は量が少ないことを表すこともできる。*gusje-ema* は、小瓶の小さなお酒ではなく、少量のお酒を意味する。(19) は友人を飲み会に誘うときに使うことができる。

- (19) *gusje-ema num-a.*  
 酒-DIM 飲む-HOR  
 「少しお酒を飲もうよ。」

### 3.2 代名詞の構造と体系

#### 3.2.1 人称代名詞の体系

人称代名詞については、伊豆山 (1992, 2004a) の研究がある。今回、格と人称代名詞の体系を確認した (表 5)。人称代名詞は、男性でも女性でも使用でき、性別による相違はない。また、一人称代名詞と二人称代名詞では、主格、属格、対格で格助詞を用いないことが多い。向格や共格の場合は格助詞が必須となる。表 5 の他に、「この写真の人は誰？」と問われた答えとして、ハダカ格で「私」と答える場合は *banu* (私) が用いられる。また、伊豆山 (2002a) には、再帰代名詞として *naara* (自分)、*du* (自分)、*naaduuduu* (めいめい) の例もあげられている (伊豆山 2002a: 353-355)。

表 5 人称代名詞の体系

| 人称  | 単数/複数   | 共通語訳 | 主格            | 属格                         | 対格※1         | 向格               | 共格              |
|-----|---------|------|---------------|----------------------------|--------------|------------------|-----------------|
| 一人称 | 単数      | 私    | <i>baa</i>    | <i>baa</i>                 | <i>banu</i>  | <i>banu=gee</i>  | <i>baN=tu</i>   |
|     | 複数 (除外) | 私達   | <i>baNda</i>  | <i>baNda</i>               | <i>baNda</i> | <i>baNda=gee</i> | <i>baNda=tu</i> |
|     | 複数 (包括) | 私達   | <i>baga</i>   | <i>baga</i>                | <i>baga</i>  | <i>baga=gee</i>  | <i>baga=tu</i>  |
| 二人称 | 単数      | お前   | <i>waa</i>    | <i>waa</i>                 | <i>wanu</i>  | <i>wanu=gee</i>  | <i>wanu=tu</i>  |
|     | 複数      | お前達  | <i>wada</i>   | <i>wada</i>                | <i>wadaa</i> | <i>wada=gee</i>  | <i>wada=tu</i>  |
| 三人称 | 単数      | 彼    | <i>uri</i> ※2 | <i>uri=nu</i>              | <i>uri</i>   | <i>uri=gee</i>   | <i>uri=tu</i>   |
|     | 複数      | 彼達   | <i>uttaa</i>  | <i>uttaa=nu/<br/>uttaa</i> | <i>uttaa</i> | <i>uttaa=gee</i> | <i>uttaa=tu</i> |

※1 = $\phi$ でもよいが、助詞の=*ba/=ju*がついてもよい。 ※2 *kari*でも言える。

具体的な用例をあげる。疑問詞疑問文「誰が海に行ったか？」に対して、「私が行った」や「私達が行った」の場合は、(20a) の *baa* (私) や、(20b) の *baNda* (私達) のみで主格が表せる。しかし、「太郎が行った」と三人称の固有名詞の場合は、(20c) のように、主格と焦点助詞が融合した *=Ndu* が必要となる。



- (20) a. *baa har-i.*  
私 行く-INF  
「私が行った。」
- b. *baNda har-i-da.*  
私達.EXCL 行く-THM-PROG.PST  
「私達が行った。」
- c. *taroo=Ndu har-i-da.*  
太郎=NOM.FOC 行く-THM-PROG.PST  
「太郎が行った。」

属格を表す=nu も、一人称代名詞の場合は必要なく、(21a) のように *baa patee* (私の畑) となる。二人称代名詞でも (21b) のように *waa patee* (お前の畑) となり=nu が必要ない。しかし、三人称代名詞の「彼の畑か？」では、(21c) のように *uri=nu patee* (彼の畑) となり、基本的に=nu を用いる。

- (21) a. *ure=e baa patee.*  
これ=TOP 私 畑  
「これは私の畑だ。」
- b. *ure=e waa patee?*  
これ=TOP お前 畑  
「これはお前の畑か？」
- c. *ure=e uri=nu patee?*  
これ=TOP 彼=GEN 畑  
「これは彼の畑か？」

また、一人称代名詞 *baa* は、男女を問わず使用でき、聞き手が上位者であろうと、下位者であろうと使用できる。しかし、二人称代名詞の *waa* は、聞き手が同位者か下位者の場合には用いやすいが、上位者には直接用いにくい。聞き手が上位者の場合は、(22) のように相手が上位者であることを名前や呼称で明示した直後であれば、*waa* (あなた) として用いることができる。また、上位者の所有物を確かめるときも、(23) のように同じく名前や呼称で上位者であることを明示した後であれば、*waa* (あなた) を用い、同時にコンピュータを尊敬語化することで使用可能となる。

- (22) *X+{accee/sizja} , waa zuN=gee=du oor-ja?*  
*X+ {おじいさん/先輩} あなた どこ=ALL=FOC いらっしやる-RLS*  
「X さん、あなたはどこへいらっしやるのですか？」

- (23) *ure=e*      *waa*      *munu=du*      *jar-oor-u?*  
 これ=TOP      あなた      もの=FOC      COP-HON-ADNM  
 「これは、あなたのものですか？」

二人称代名詞の尊称はないが、卑称として、*waNza* (きさま) がある。複数形は *waNza-numee* (きさま達) となる。

### 3.2.2 指示代名詞 (指示詞) の体系

指示代名詞は、*ku* 系、*u* 系、*ka* 系の 3 系統がある。一見、共通語のコレ、ソレ、アレに対応するように見えるが、*ku* 系と *u* 系は区別しがたいことが多い、という指摘がある (伊豆山 2002a: 356)。しかし、そもそも指示詞の体系が共通語の体系と異なるのではないかと考えている。

荻野 (2015) では、直示用法の基本として、単一のものは、距離に関係なく *u* で指せることを指摘した。例えば、闇夜で周囲が見えない中、夜空に何か光っている単一のものを見たとき、(24) のように *uri* を用いるのが普通である。近距離で複数のものがあれば、*u* 系に対する *ku* 系で表すことができ、遠近の対比があるものは、*u* 系に対する *ka* 系で遠い方のものを表すこととなる。そのため、*u* 系の *double binary* となっている<sup>21</sup>。指示詞の体系は次のようになる (表 6)。

- (24) *uri*      *mii*      *mir-i*.  
 それ 見る.SEQ      みる-IMP  
 「あれを<sup>21</sup>見てみる。」

表 6 指示詞の体系 (該当する形式がない場合は一で表す)

|     |       | 単一のもの<br>距離感なし    | 二つ以上で距離感があるとき、 <i>u</i> に対して |                |       |                |
|-----|-------|-------------------|------------------------------|----------------|-------|----------------|
|     |       |                   | 近称単数                         |                | 遠称単数  |                |
| 名詞  | 人・物   | <i>uri</i>        | これ                           | <i>kuri</i>    | あれ    | <i>kari</i>    |
|     | 場所    | <i>uma</i>        | ここ                           | <i>kuma</i>    | あそこ   | <i>kama</i>    |
|     | 場所短縮形 | <i>Nga</i>        | ここに                          | <i>Nga</i>     | あそこに  | <i>kaNga</i>   |
|     | 方向短縮形 | <i>N=gee</i>      | ここ=へ                         | <i>kuN=gee</i> | あそこ=へ | <i>kaN=gee</i> |
| 副詞  | 性状    | <i>kaNzi/aNzi</i> | こう                           | <i>kaNzi</i>   | ああ    | <i>aNzi</i>    |
| 連体詞 | 人・物   | <i>unu</i>        | この                           | <i>kunu</i>    | あの    | <i>kanu</i>    |
| 名詞  | 人卑称   | <i>uruza</i>      | こいつめ                         | <i>kuruza</i>  | —     |                |
|     |       | <i>uNza</i>       | あいつめ                         | <i>kuNza</i>   |       |                |
|     |       |                   | 近称複数                         |                | 遠称複数  |                |
| 名詞  | 人・物   | <i>ut-taa</i>     | これらが                         | <i>kut-taa</i> | あれらが  | <i>kat-taa</i> |

<sup>21</sup> *double binary* とは、*u* 系が、*ku* 系と対になると同時に、*ka* 系とも対になっていることを意味している。

また、u系は二人称領域と連動しないことも指摘した。話し手にとって、目に見えない聞き手の領域は「近」と認識できないため、u系で指すことができない。例えば、旅行をしている友人に電話で天気を尋ねる場合、共通語では「ソッチの天気はどうか？」とソ系指示詞が使用できるが、宮良方言では、聞き手領域をu系で指すことはできず、通常は(25)のように二人称代名詞を用いる。話し手の周辺が近称としてu系の領域になるため、電話の向こうにいる聞き手の領域は、ka系領域として捉えることも可能で、(26)を許容する話者もいる。

(25) *waa nee=nu oosIkI=ja noobai-duru?*  
 お前 所=GEN 天気=TOP どのような-STAT  
 「そっちの天気はどうか。」

(26) *kama=Nga=nu oosIkI=ja noobai-duru?*  
 あそこ=LOC=GEN 天気=TOP どのような-STAT  
 「そっちの天気はどうか。」

### 3.3 数詞の体系と構造

和語系の数詞は、語根が取り出せるが、語根のみで使用することができず、必ず接尾辞が必要となる(表7)。

表7 和語系の数詞(人の接尾辞がついた形式のみ、アクセント情報(下がり目)を ] で表す)

| 数  | 語根          | -uru/taaru<br>(人) | -zI/tsI<br>(つ) | -gI(gu)/ku<br>(個) | -gara/kara<br>(匹, 羽) | -musu<br>(回)        |
|----|-------------|-------------------|----------------|-------------------|----------------------|---------------------|
| 1  | pItu,φutu-  | pItu-uru          | pitii-zI       | pItu-gI(gu)       | pItu-gara            | pItu-musu           |
| 2  | φuta-       | φuta]-aru         | φutaa-zI       | φuta-gI(gu)       | φuta-gara            | φuta-musu           |
| 3  | mi{su/i}-   | misu]-taaru       | mii-tsI        | misu-ku           | misu-kara            | mii-musu            |
| 4  | juu-        | jut]-taaru        | juu-tsI        | juk-ku            | juk-kara             | juu-musu            |
| 5  | itsI-       | itsI-taaru        | itsI-tsI       | itsI-ku           | istI-kara            | itsu-musu           |
| 6  | NN-         | Nt]-taaru         | NN-tsI         | NN-ku             | NN-kara              | NN-musu             |
| 7  | nana-       | nana-taaru        | nana-tsI       | nana-ku           | nana-kara            | nana-musu           |
| 8  | jaa-        | jat]-taaru        | jaa-tsI        | jaa-ku            | jak-kara             | jaa-musu            |
| 9  | kukunu(su)- | kukunu-taaru      | kukunu-tsI     | kukunuk-ku        | kukunuk-kara         | kukunu{su/kku}-musu |
| 10 | tuu-        | tut]-taaru        | tuu            | tuk-ku            | tuk-kara             | tuu-musu            |

共通語では、助数詞の「個」の場合、「いっこ、にこ、さんこ、よんこ…」と漢語系の数詞を用いるが、宮良方言では和語系の数詞を用い、あえて共通語的に言うとする、ヒトコ、フタコ、ミッコ、ヨッコ…のようになる。助数詞は動物(牛、ヤギ、犬、ネコ)や鳥(カラス、スズメ)の場合は、-karaを用いるが、一(pItu-)と二(φuta-)の場合は、接尾辞の語頭が有声音化し、-gara

となる。一、二のみ有声音化する現象は、他の-zI/tsI (つ) , -gI(gu)/ku (個) でも見られる。-gI (個) の音声は、/gI~/ /gu/ で揺れる。ただ、話者によっては /gu/ だと断定し、揺れないこともある。人を表す-taaru では有声音化はしないが、「ひとり、ふたり」の場合は、変則的な形態となっている。一と二のみ、なぜこのような現象が起こるのか、現時点では不明である。

漢語系の数詞は、順番を表すときに用いられる(表8)。だが、四と七では、通常和語系の数詞を使用するため、表8では( )で示す。他にも、漢語系の数詞は、競争での着順や伝統的な家の座敷の間取りである一番座、二番座、三番座で用いる。また、月でも用いる。

表8 漢語系の数詞

| 数  | 漢語系      | 番/順位            | 部屋の間取り      | 月  |
|----|----------|-----------------|-------------|--|
| 1  | itsI/ici | itsI-baN        | istI-baN-za | i{tsI/ci}-Ng <sup>(w)</sup> azu                        |
| 2  | ni       | ni-baN          | ni-baN-za   | ni-Ng <sup>(w)</sup> azu                               |
| 3  | saN      | saN-baN         | saN-baN-za  | sa-Ng <sup>(w)</sup> azu                               |
| 4  | sI       | (joN-baN/jubaN) |             | sI-Ng <sup>(w)</sup> azu                               |
| 5  | gu/go    | go-baN          |             | gu-Ng <sup>(w)</sup> azu                               |
| 6  | ruku     | ruku-baN        |             | ruku-Ng <sup>(w)</sup> azu/ruku-Ng <sup>(w)</sup> atsu |
| 7  | sici     | (nana-baN)      |             | sici-g <sup>w</sup> aNguzu/sici-Ng <sup>(w)</sup> azu  |
| 8  | haci     | haci-baN        |             | haci-Ng <sup>(w)</sup> azu                             |
| 9  | ku       | ku-baN          |             | ku-Ng <sup>(w)</sup> azu                               |
| 10 | zjuu     | zjuu-baN        |             | zju-Ng <sup>(w)</sup> azu                              |
| 11 | zjuuitsI | zjuuitsI-baN    |             | zjuuitsI-Ng <sup>(w)</sup> azu                         |
| 12 | zjuuni   | zjuuni-baN      |             | zjuuni-Ng <sup>(w)</sup> azu                           |

### 3.4 格の種類と機能

格助詞としては以下のような語があり、それぞれの機能をまとめた(表9)。

表9 格の種類と機能

| 格     | 形式       | グロス  | 共通語訳 | 基本的機能・意味               |
|-------|----------|------|------|------------------------|
| ① 主格  | =nu      | NOM  | が    | 動作主                    |
| ② 属格  | =nu      | GEN  | の    | 所有, 所属                 |
| ③ 対格1 | =ba      | ACC  | を    | 他動詞の対象(juよりも強調), 変化の結果 |
| ④ 対格2 | =ju      | ACC2 | を    | 他動詞の対象                 |
| ⑤ 与格1 | =ge(e)※1 | DAT  | に    | 受け手                    |
| ⑥ 与格2 | =Nga     | DAT2 | に    | 所有者, 受け身動作主, 追加, 時間    |
| ⑦ 場所格 | =Nga     | LOC  | に, で | 出来事の場所, 存在の場所, 移動結果    |

|       |          |      |    |                     |
|-------|----------|------|----|---------------------|
| ⑧ 向格  | =gee     | ALL  | へ  | 移動目標, 着点, 受益者, 変化   |
| ⑨ 奪格  | =gara    | ABL  | から | 出発点, 授与者, 比較の対象, 手段 |
| ⑩ 具格  | =saari※2 | INST | で  | 道具, 材料, 手段, 原因      |
| ⑪ 共格  | =tu      | COM  | と  | 共に行う相手              |
| ⑫ 限界格 | =madi    | TERM | まで | 限界                  |

※1 gee 格は gee と 2 モーラで発音する場合と, ge と 1 モーラで発音する場合がある。調査した範囲では, 2 モーラの方が多いため, 本稿では 2 モーラ表記で統一する。

※2 saari は, saani と発音する話者がいる。

用例文に格助詞のグロスを付す際は, 二つ目の形式に数字をつけることにした。例えば, 対格では, =ba と=ju があるが, =ju の場合に ACC2 と付すことにする。

①主格 1 : nu 格。=nu は, (27) のように無生物主語の場合に多く見られる。有生物が動作主の場合は, (28) のように, =nu に焦点助詞=du が融合した=Ndu を用いるのが普通である。

(27) *tslkl=nu kaihee=soonaa.*

月=NOM きれいだ=SFP

「月がきれいだな。」

(28) *taroo=Ndu tsukue=ju bat-ta.*

太郎=NOM.FOC 机=ACC2 たたく-PST

「太郎が机をたたいた。」

②属格 : nu 格。所有を表すとき (29) のように, =nu を用いる。しかし, (30) のように一語化していると思われる場合は, 無助詞 (=φ) でも連体修飾が可能である。

(29) *taroo=nu jaa=dara.*

太郎=GEN 家=SFP

「太郎の家だよ。」

(30) *aba=φ kaza hi-i...*

油 匂い する-SEQ

「油の匂いがして…」

③対格 1 : ba 格。対格は, (31) のように無助詞 (=φ) となることも多い。(32) のように対象を表すときや, (33) のように経路を表す時に用いる。また, (34) は非対格主語の例であり, 気象用語が主語の場合に現れる。この用法での=ba は, 戦前生まれの A 氏のみが用いる。

- (31) *taroo=Ndu gusi=ϕ nuN-da.*  
 太郎=NOM.FOC 酒=ϕ 飲む-PST  
 「太郎は酒を飲んだ。」
- (32) *taroo=ja duu=nu jaa=ba=du utudu=gee hii=coo.*  
 太郎=TOP 自分=GEN 家=ACC=FOC 弟=ALL やる-INF=REP  
 「太郎は自分の家を弟にあげた。」
- (33) *taroo=ja patsI=ba badar-i pat-ta.*  
 太郎=TOP 橋=ACC 渡る-SEQ 行く-PST  
 「太郎は橋を渡っていった。」
- (34) *juubi ami=ba ϕu-i suturehee=nu patee=gee har-i.*  
 タベ 雨=ACC 降る-SEQ べちゃべちゃ=GEN 畑=ALL 行く-INF  
 「ゆうべ雨が降り、べちゃべちゃの畑へ行った。」

④対格2 : ju 格。(35) のように対象を表したり, (36) のように起点を表したりする。=ba と=ju の違いは, まだ明確ではないが, 特定性の相違ではないかと考えている。例えば, (37) のように *sara=ju* (皿を) であれば, いくつもある皿の中のどれかを割ったという解釈が出てくる。逆に, 特定された皿であれば=ba を用いるという。何か一つを特定すると, 印象として強く感じられるようで, 話者は=juの方が, =ba よりも柔らかい言い方だと話す。

- (35)(=(28)) *taroo=Ndu tsukue=ju bat-ta.*  
 太郎=NOM.FOC 机=ACC2 たたく-PST  
 「太郎が机をたたいた。」
- (36) *taroo=ja basu=ju uri-ta.*  
 太郎=TOP バス=ACC2 降りる-PFV  
 「太郎はバスを降りた。」
- (37) *taroo=Ndu бага jaa=Nga aru sara=ju bat-ta.*  
 太郎=NOM.FOC 私達.INCL 家=LOC ある 皿=ACC2 割る-PST  
 「太郎は私の家にある皿を割った。」

⑤与格1 : gee (ge) 格。(38)(39) のように間接目的語の二格として=geeを用いる。もともと, =gee は方向を表す機能があったが, その機能だけでなく, 与格の機能まで担うようになったのではないかと考える。受け手を表す用法である。

- (38) *unu k<sup>w</sup>aasI banu=gee ϕ-uu-nu?*  
 この 菓子 私=DAT くれる-THM-NEG  
 「この菓子を私にくれない?」

- (39) *taroo=ja utudu=gee hanasI=ba hii-da=soo.*  
 太郎=TOP 弟=ALL 話=ACC する-PROG.PST=SFP  
 「太郎は弟に話をした。」

⑥与格 2 : Nga 格。(40) は所有の関係, (41) は受身文の動作主, (42) は時間を表す用法である。(43) は「大根」に加えて「ごぼうと豚肉を入れる」ことを表し, 「大根」は共格=tu でマークすることもできるが, 「大根」が中心的な具材のときには=Nga でマークすることができる。

- (40) *taroo={ja / Nga} tuzI ur-a-nu=dara.*  
 太郎={TOP/DAT2} 妻=φ いる-THM-NEG=SFP  
 「太郎 {は/に} 嫁がないよ。」
- (41) *taroo=ja keesatsu=Nga=du katsam-ar-i=coo.*  
 太郎=TOP 警察=DAT2=FOC つかまえる-PASS-INF=REP  
 「太郎は警察につかまった。」
- (42) *taroo=ja saNzi=Nga jaa=gee mudur-i k-I-ta=dara.*  
 太郎=TOP 三時=DAT2 家=ALL 戻る-SEQ 来る-THM-PST=SFP  
 「太郎は3時に家に戻った。」
- (43) *nabi=gee daikuni=Nga guNboo=tu oo+sisi=du irir-u.*  
 鍋=ALL 大根=DAT2 ごぼう=COM 豚+肉=FOC 入れる-ADNM  
 「鍋へ大根とごぼうと豚肉を入れる。」

⑦場所格 : Nga 格。(44) は存在の場所, (45) は動作の場所を表す。共通語ではニ格とデ格に相当する。

- (44) *taroo=ja mee naai tookjoo=Nga=du ur-u.*  
 太郎=TOP もう ずっと 東京=LOC=FOC いる-NPST  
 「太郎はずっと東京にいる。」
- (45) *taroo=ja gakkoo=Nga dusI=tu Nka-i=coo.*  
 太郎=TOP 学校=LOC 友達=COM 向かう-INF=REP  
 「太郎は学校で友達に会ったそうだ。」

⑧向格 : gee 格。(46) は移動の着点, (47) は変化の結果としての着点を表す。なお, 変化を表す「先生になった」のニ格は, (48) のように無助詞となることが多い。大人になった最終着点が「先生」であるため=gee でも使用可能なのだが, 「変化」というよりも, 現在の状況として「先生をしている」という状態性に注目をしているためではないかと考えられる。

- (46) *taroo=ja matsI=gee sik-i-ta.*  
 太郎=TOP 街=ALL 着く -THM-PFV  
 「太郎は街に着いた。」
- (47) *taroo=ja akkoN=ba  $\phi$ utaazI=gee bar-eer-u.*  
 太郎=TOP サツマイモ=ACC 二つ=ALL 割る -PFV-ADNM  
 「太郎はサツモイモを二つに割った。」
- (48) *taroo=ja nama siNsii{=  $\phi$  / =gee} nar-i-duru=coo.*  
 太郎=TOP 今 先生{=  $\phi$  / =ALL} なる -SEQ-STAT=REP  
 「太郎は先生になった。」

⑨奪格：gara 格。(49) は動作主の出発点の場所を表し，(50) は授与者を表し，移動する物の出発点を表している。(51) は比較の用法である。(52) は手段の用法であり，現在は=saari(saani) を用いるのが一般的だが，A氏のみ=gara を手段の用法で使用できる。

- (49) *taroo=ja jaa=gara  $\phi$ uka=gee Ndi-ta.*  
 太郎=TOP 家=ABL 外=ALL 出る -PFV  
 「太郎は家から外に出た。」
- (50) *taroo=ja uja=gara ziN=ba it-ta=dara.*  
 太郎=TOP 親=ABL 金=ACC もらう -PST=SFP  
 「太郎は親にお金をもらったよ。」
- (51) *taroo=ja utudu=gara taki=Ndu takahar-u.*  
 太郎=TOP 弟=ABL 背丈=NOM.FOC 高い -ADNM  
 「太郎は弟より背が高い。」
- (52) *katsI=gara arag-i har-ja-N=na.*  
 徒歩=ABL 歩く -SEQ 行く -RLS-DEF=SFP  
 「徒歩で歩いて行ったね。」

⑩具格：saari(saani) 格。(53) は手段を表し，(54) は道具を表している。

- (53) *taroo=ja makarI sara suidoo=nu mizu=saari aara-i-ru.*  
 太郎=TOP お椀 皿 水道=GEN 水=INST 洗う -THM-PROG.NPST  
 「太郎は食器を水道の水で洗っている。」
- (54) *taroo=ja pooza=saari tii=ba kis-i.*  
 太郎=TOP 包丁=INST 手=ACC 切る -INF  
 「太郎は包丁で指を切った。」



⑪共格：tu 格。動作が成り立つために共に行動する人や、並列するものを表す。(55)=(45) は共通語の「～に会う」に相当する二格がなく、「友達と向かい合う」に意識した例である。

(55) taroo=ja gakkoo=Nga dusI=tu Nka-i=coo.  
 太郎=TOP 学校=LOC 友達=COM 向かう-INF=REP  
 「太郎は学校で友達と会ったそうだ。」

⑫限界格：madi 格。(56) のように限界点を表す。

(56) taroo=ja jaa=madi arag-i pat-ta.  
 太郎=TOP 家=TERM 歩く-SEQ 行く-PST  
 「太郎は家まで歩いて帰った。」

#### 4. 動詞の形態論

##### 4.1 屈折形態論

伊豆山（1997a, 1999a, 1999b, 2000, 2001a, 2001b, 2002a, 2004b, 2005）や新垣（2000）に、動詞活用に関して一連の先行研究があり、動詞の主な屈折形式は分かる。しかし、先行研究では、弱変化動詞（いわゆる一段活用動詞相当）や、強変化動詞の中でも古典の八行四段（現代語ワ・ア行五段動詞）由来の動詞での語幹と屈折接辞の形態に関しては記述が少ない。動詞全体の活用の状況が分からないため、本稿では、それらの点を踏まえて記述することとした。その際、文末終止と非文末終止に分けて表を作成する。

動詞は「語幹（-語幹形成母音）-屈折接辞」で構成されている。否定接辞-*nu*の前接母音で動詞のタイプ分けを行うと、語幹形成母音が-*a*のタイプと-*u*のタイプに分かれる。よって、表10のように、-*a*のタイプを強変化動詞、-*u*のタイプを弱変化動詞と呼ぶことにする。また、「来る」と「する」は、不規則変化動詞と考える。以下、カ変とサ変と呼ぶ。以上より、動詞の屈折タイプは、強変化動詞、弱変化動詞、カ変、サ変の四種類になる。

表10 否定形式と命令形式をもとに分類した動詞の屈折タイプ

|        |          |         |           |          |         |         |         |
|--------|----------|---------|-----------|----------|---------|---------|---------|
| 語例     | 書く       | 起きる     | くれる       | 酔う       | 越える     | 来る      | する      |
| 非過去    | kak-uN   | ukir-uN | hi(i)r-uN | biir-uN  | kuir-uN | k(u)-uN | ϕ(u)-uN |
| 否定形式   | kak-a-nu | uk-u-nu | ϕ-uu-nu   | bj-uu-nu | k-oo-nu | k-uu-nu | h-aa-nu |
| 語幹形成母音 | -a       | -u      |           |          |         | -uu     | -aa     |

動詞の文末終止の屈折形式は、以下の通りである（表11）。弱変化動詞は、ukir-uN（起きる）で代表させる。

表 11 文末終止の動詞屈折形式

|       |    | 共通語<br>代表形<br>スル | 強変化動詞<br>kak-<br>「書く」 | 弱変化動詞<br>uk-/uki-/ukir-<br>「起きる」 | カ変<br>k-<br>「来る」         | サ変<br>h-/s-<br>「する」 |
|-------|----|------------------|-----------------------|----------------------------------|--------------------------|---------------------|
| 非過去   | 肯定 | スル               | kak-uN                | ukir-uN                          | k-u(u)-N                 | ϕ-u(u)-N            |
|       | 否定 | シナイ              | kak-a-nu              | uk-u-nu                          | k-uu-nu                  | h-aa-nu             |
| 過去    | 肯定 | シタ               | kak-I-da              | uki-da                           | k-I-ta                   | s-I-ta              |
|       | 肯定 | シタ               | kak-i                 | uki                              | k-ii                     | h-ii                |
|       | 否定 | シナカッタ            | kak-a-naa-da          | uk-u-naa-da                      | k-uu-naa-da              | h-aa-naa-da         |
| 完了    | 肯定 | シタ               | kak-i-ta              | uki-ta                           | k-ii-ta                  | h-ii-ta             |
| 意志・勧誘 |    | シヨウ              | kak-a                 | ukir-a<br>uk-u=Nba               | k-uu=Nba                 | h-aa=Nba            |
| 命令 1  |    | セヨ               | kak-ja                | ukir-ja                          | k-u-ja                   | h-jaa               |
| 命令 2  |    | セヨ               | kak-i                 | ukir-i                           | k-uu                     | h-ii                |
| 禁止    |    | スルナ              | kak-I-na              | uki-na                           | k-II-na                  | s-II-na             |
| 願望 1  |    | シタイ              | kak-I-pIsaN           | uki-pIsaN                        | k-II-pIsaN<br>k-ii-pIsaN | s-II-pIsaN          |
| 願望 2  |    | シタイ              | kak-I-tahaN           | uki-tahaN                        | k-I(I)-tahaN             | s-I-tahaN           |

※ 意志・勧誘は、uk-u では言えず、必ず=Nba が必要となる。現時点では終助詞だと考えている。カ変の「来る」「する」も同様に=Nba が必要である。

強変化動詞は語幹形成母音-a に否定接辞-nu が後接する。語幹末子音ごとに語例をあげる。k- (書く kak-) , s- (押す us-, 着る kIs-) , h- (殺す kurah-, 売る〈買わず相当〉kaah-) <sup>22</sup>, ts- (立つ tats-, 母音 /i/ の直前では口蓋化して tac-) , n- (死ぬ sIn-) , m- (飲む num-) , r- (取る tur-) , b- (かぶる kab-, 眠る nib-は nim-とも交替する) , g- (歩く arag-) , z- (言う iz-) などがある。語幹が h- で終わる動詞は、過去形式が、s-I-ta と変則的な活用になる (×h-I-da)。例えば、殺す kurah-は、過去形式が kuras-I-ta になり、完了形式では、語幹は h のままで kurah-i-ta になる。

非文末終止の活用接辞をあげる (表 12)。仮定条件に複数の形式があるが、用法の違いは現時点では不明である。一般的に、仮定条件 1 が多く用いられる。用法と意味の違いは、今後の課題である。

<sup>22</sup> 他動詞性を持ち、石垣方言で語幹末が s-となる語は、宮良方言では h-となる。

表 12 非文末終止の動詞屈折形式（該当する形式がない場合は一で表す）

|        | 共通語       | 強変化動詞         | 弱変化動詞                   | カ変           | サ変                    |
|--------|-----------|---------------|-------------------------|--------------|-----------------------|
|        | 代表形<br>スル | kak-<br>「書く」  | uk-/uki-/ukir-<br>「起きる」 | k-<br>「来る」   | h-/s-<br>「する」         |
| 並列動作   | シナガラ      | kak-I-taNnaa  | uki-taNnaa              | k-II-taNnaa  | s-II-taNnaa           |
| 目的     | シニ        | kak-I-na      | -                       | -            | s-II-na               |
| 並列     | シタリ       | kak-I-tarI    | uki-tarI                | k-II-tarI    | s-II-tarI             |
| 継起     | シテ        | kak-i         | uki                     | k-ii         | h-ii                  |
| 連体     | スル（人）     | kak-u         | ukir-u                  | k-uu         | ϕ-uu                  |
| 已然     | スレバ       | kak-ja        | ukir-ja                 | k-jaa        | h-jaa                 |
| 仮定条件 1 | スルナラ      | kak-u-ka      | ukir-u-ka               | k-uu-ka      | ϕ-uu-ka               |
| 仮定条件 2 | スルナラ      | kak-i-nee     | uki-nee                 | k-ii-nee     | h-ii-nee              |
| 仮定条件 3 | スレバ       | kak-a-ba      | ukir-a-ba<br>uk-u-ba    | k-uu-ba      | h-aa-ba               |
| 理由     | スルノデ      | kak-u-kii     | ukir-u-kii              | k-II-kii     | ϕ-uu-kii              |
| 理由過去   | シタノデ      | kak-I-dara    | uki-dara                | k-II-dara    | s-uu-dara<br>s-I-tara |
| 譲歩     | シテモ       | kak-a-baN     | ukir-a-baN              | k-uu-baN     | h-aa-baN              |
| 否定譲歩 1 | シナクテモ     | kak-a-naa=teN | uk-u-naa=teN            | k-uu-naa=teN | h-aa-naa=teN          |
| 否定譲歩 2 | シナクテモ     | kak-a-N-tiN   | uk-u-N-tiN              | k-uu-N-tiN   | h-aa-N-tiN            |

以上を学校文法の活用表風に、語根と派生接辞の母音の関係でまとめると、強変化動詞は表 13 のようになる。

表 13 強変化動詞「書く」の語幹と続く語の関係

| 活用形   | 語幹 kak- | 続く語                 |
|-------|---------|---------------------|
| 未然形   | a       | 否定 nu 勧誘 ϕ 仮定 3 ba  |
| 連用形 1 | I       | 過去 da 禁止 na 並列 tarI |
| 連用形 2 | i       | 完了 ta 不定 ϕ 継起 ϕ     |
| 終止形   | uN      | 終止 ϕ                |
| 連体形   | u       | 連体 ϕ 仮定 1 ka        |
| 已然形   | ja      | 已然 ϕ                |
| 命令形 1 | ja      | 命令 1 ϕ              |
| 命令形 2 | i       | 命令 2 ϕ              |

学校文法と大きく異なる点は、連用形が二形式あることで、過去接辞-daに続くときは、語幹形成母音が-Iとなり、完了接辞-taに続くときは語幹形成母音が-iとなる。そこで、-Iとなる方を連用形1、-iとなる方を連用形2と呼ぶこととする。そのため、強変化動詞での活用形は、「未然形、連用形1、連用形2、終止形、連体形、已然形、命令形1、命令形2」となる。

弱変化動詞では、後述するアスペクトの派生接辞との関連も考え、現時点では、語幹を三形式立てることとする。例えば、ukir-uN（起きる）では、uk-を語幹1、uki-を語幹2、ukir-を語幹3とする（表14）。過去接辞-daと完了接辞-taは、共に-iに続くため、強変化に見られた連用形1と連用形2の区別がなくなり、連用形としてまとめることとした。弱変化動詞での活用形は、「未然形、連用形、終止形、連体形、已然形、命令形1、命令形2」となる。こうしてみると、語幹1に否定接辞が後接し、語幹2に強変化動詞での-Iと-iに続く語が後接し（過去接辞や完了接辞や禁止接辞などが後接する）、語幹3は強変化動詞と同じ屈折形式が見られることが分かる。なお、否定接辞-nuが後接する際、misir-uN（見せる）など、語幹1がmis-のようにs-となる語は、語幹1にわたり音-j-が挿入され、mis-j-u-nu（見せない）となる。同様の例として、bis-j-u-nu（座らさない）がある。

表14 弱変化動詞 ukir-uN（起きる）の語幹と続く語の関係

| 弱変化動詞 ukir-uN（起きる） |                |             |                 |             |                  |            |
|--------------------|----------------|-------------|-----------------|-------------|------------------|------------|
| 活用形                | 語幹<br>1<br>uk- | 語幹1を取る語     | 語幹<br>2<br>uki- | 語幹2を取る語     | 語幹<br>3<br>ukir- | 語幹3を取る語    |
| 未然                 | u              | 否定 nu 仮定 ba |                 |             | a                | 勧誘 φ 仮定 ba |
| 連用                 |                |             | φ               | 過去 da 完了 ta |                  |            |
| 終止                 |                |             |                 |             | uN               | 終止 φ       |
| 連体                 |                |             |                 |             | u                | 連体 φ 仮定 ka |
| 已然                 |                |             |                 |             | ja               | 已然 φ       |
| 命令1                |                |             |                 |             | ja               | 命令1 φ      |
| 命令2                |                |             |                 |             | i                | 命令2 φ      |

また、弱変化動詞では、hi(i)r-uN（くれる・やる）やbiir-uN（酔う）のように、語幹2に-ii-が含まれる場合、語幹1に続く語幹形成母音が-uu-と長くなる。その際、語幹3で音節構造に揺れがあるか否かで、語幹1にわたり音-j-が挿入されるか否かが決まる。hi(i)r-uN（くれる・やる）は、hiir-とhir-で揺れが見られるが、biir-uN（酔う）は、biir-となり揺れが見られない。hi(i)r-uN（くれる・やる）の語幹1はh-だが、biir-uN（酔う）の語幹1はbj-となる。語幹2は、hi(i)r-uN（くれる・やる）はhii-で、biir-uN（酔う）はbii-となる。以下、表15にhi(i)r-uN（くれる・やる）の例を、表16にbiir-uN（酔う）の例をあげる。

表 15 弱変化動詞 hi(i)r-uN (くれる・やる) の語幹と続く語の関係

| 弱変化動詞 hi(i)r-uN (くれる・やる) |               |             |                 |             |                    |            |
|--------------------------|---------------|-------------|-----------------|-------------|--------------------|------------|
| 活用形                      | 語幹<br>1<br>h- | 語幹 1 を取る語   | 語幹<br>2<br>hii- | 語幹 2 を取る語   | 語幹<br>3<br>hi(i)r- | 語幹 3 を取る語  |
| 未然                       | uu            | 否定 nu 仮定 ba |                 |             | a                  | 勧誘 φ 仮定 ba |
| 連用                       |               |             | φ               | 過去 da 完了 ta |                    |            |
| 終止                       |               |             |                 |             | uN                 | 終止 φ       |
| 連体                       | uu            | 仮定 ka       |                 |             | u                  | 連体 φ 仮定 ka |
| 已然                       |               |             |                 |             | ja                 | 已然 φ       |
| 命令 1                     |               |             |                 |             | ja                 | 命令 1 φ     |
| 命令 2                     |               |             |                 |             | i                  | 命令 2 φ     |

表 16 弱変化動詞「酔う」の語幹と続く語の関係

| 弱変化動詞 biir-uN (酔う) |                |             |                 |             |                  |            |
|--------------------|----------------|-------------|-----------------|-------------|------------------|------------|
| 活用形                | 語幹<br>1<br>bj- | 語幹 1 を取る語   | 語幹<br>2<br>bii- | 語幹 2 を取る語   | 語幹<br>3<br>biir- | 語幹 3 を取る語  |
| 未然                 | uu             | 否定 nu 仮定 ba |                 |             | a                | 勧誘 φ 仮定 ba |
| 連用                 |                |             | φ               | 過去 da 完了 ta |                  |            |
| 終止                 |                |             |                 |             | uN               | 終止 φ       |
| 連体                 |                |             |                 |             | u                | 連体 φ 仮定 ka |
| 已然                 |                |             |                 |             | ja               | 已然 φ       |
| 命令 1               |                |             |                 |             | ja               | 命令 1 φ     |
| 命令 2               |                |             |                 |             | i                | 命令 2 φ     |

表 15 の hi(i)r-uN (くれる・やる) や表 16 の biir-uN (酔う) で、語幹 1 に続く語幹形成母音が -uu となる理由は現時点では不明である。少なくとも否定接辞 -nu は、語幹が 1 モーラであることを許容しないのであろうと推測する。

語幹 1 に続く語幹形成母音が -uu- ではなく、-oo- になる場合もある。表 17 に kuir-uN (超える) の例をあげる。否定接辞 -nu が後接すると k-oo-nu (越えない) となる。表 15 の hi(i)r-uN (くれる・やる) や表 16 の biir-uN (酔う) での -uu- と異なり、-oo- となるのは、語幹と否定接辞 -nu の形態素境界で生じる形態音韻規則が適応されている可能性がある。ちなみに、形態素境界で -uu- が -oo- になる例としては、後述するが ho-oN (降る) がある。-uu- が -oo- に変化するのは確かなのだが、なぜ、そのような音変化をするのかは、現時点では不明である。もし、形態音韻

規則により ko-o-nu (越えない) となるのなら, kuir-uN (超える) の語幹を ku-と考える方がよいことになる。だが現時点では, 表層的な記述をすることに留め, 表 15 の hi(i)r-uN (くれる・やる) や表 16 の biir-uN (酔う) と同様に考え, kuir-uN (超える) の語幹を k-/kui-/kuir-の三形式とする。弱変化動詞の語幹をどう考えるかという点については, 今後の課題とする。

表 17 弱変化動詞「超える」の語幹と続く語の関係

| 弱変化動詞 kuir-uN (超える) |               |             |                 |             |                   |            |
|---------------------|---------------|-------------|-----------------|-------------|-------------------|------------|
| 活用形                 | 語幹<br>1<br>k- | 語幹 1 を取る語   | 語幹<br>2<br>kui- | 語幹 2 を取る語   | 語<br>幹 3<br>kuir- | 語幹 3 を取る語  |
| 未然                  | oo            | 否定 nu 仮定 ba |                 |             | a                 | 勧誘 φ 仮定 ba |
| 連用                  |               |             | φ               | 過去 da 完了 ta |                   |            |
| 終止                  |               |             |                 |             | uN                | 終止 φ       |
| 連体                  | oo            | 仮定 ka       |                 |             | u                 | 連体 φ 仮定 ka |
| 已然                  |               |             |                 |             | ja                | 已然 φ       |
| 命令 1                |               |             | ja              | 命令 1 φ      | ja                | 命令 1 φ     |
| 命令 2                |               |             |                 |             | i                 | 命令 2 φ     |

弱変化動詞の例を (57) にあげる。

(57) a. 語幹 1 が-C-, 語幹 2 が-i-, 語幹 3 が-ir-となる語の例

ukir-uN (起きる) uk-/uki-/ukir-

ibir-uN (植える) ib-/ibi-/ibir-

basikir-uN (忘れる) basik-/basiki-/basikir-

b. 語幹 1 が-C-, 語幹 2 が-ii-, 語幹 3 が-i(i)r-となる語の例

hi(i)r-uN (くれる・やる) h-/hii-/hi(i)r-

mi(i)r-uN (見る) m-/mii-/mi(i)r-

c. 語幹 1 が-Cj-, 語幹 2 が-ii-, 語幹 3 が-iir-となる語の例

biir-uN (酔う) bj-/bii-/biir-

kiir-uN (消える) kj-/kii-/kiir-

niir-uN (煮える) nj-/nii-/niir-

d. 語幹 1 が-C-, 語幹 2 が-ui-, 語幹 3 が-uir-となる語の例

kuir-uN (超える) k-/kui-/kuir-

muir-uN (燃える) m-/mui-/muir-

ubuir-uN (覚える) ub-/ubui-/ubuir-

(57b) mi(i)r-uN (見る) は, hi(i)r-uN (くれる・やる) と同じように, 語幹 3 の音節構造が CVVC ~CVC で揺れている。mi(i)r-uN (見る) の屈折形式を, 非文末終止形式も合わせて示す (表 18)。

表 18 弱変化動詞「見る」の屈折形式

|       |    | 現代語訳      | 弱変化動詞                    |        | 現代語訳                       | 弱変化動詞                    |  |
|-------|----|-----------|--------------------------|--------|----------------------------|--------------------------|--|
|       |    |           | m-/mii-/mi(i)r-          |        |                            | m-/mii-/mi(i)r-          |  |
| 非過去   | 肯定 | ミル        | mi(i)r-uN                | 並列動作   | ミナガラ                       | mii-taNnaa               |  |
|       | 否定 | ミナイ       | mu-u-nu                  | 目的     | ミニ                         | mii-na                   |  |
| 過去    | 肯定 | ミタ        | mii-da                   | 並列     | ミタリ                        | mii-tarI                 |  |
|       | 肯定 | ミタ        | mii                      | 継起     | ミテ                         | mii                      |  |
|       | 否定 | ミナカッタ     | mu-u-naa-da              | 連体     | ミル (人)                     | mi(i)r-u                 |  |
| 完了    | 肯定 | ミタ        | mii-ta                   | 已然     | ミレバ                        | mi(i)r-ja                |  |
| 意志・勧誘 |    | ミヨウ       | mi(i)r-a<br>mu-u-Nba (古) | 仮定条件 1 | ミルナラ                       | mi(i)r-u-ka              |  |
| 命令 1  | セヨ | mi(i)r-ja | 仮定条件 2                   | ミルナラ   | mii-nee                    |                          |  |
| 命令 2  | セヨ | mi(i)r-i  | 仮定条件 3                   | ミルナラ   | mi(i)r-a-ba<br>mu-u-ba (古) |                          |  |
| 禁止    |    | ミルナ       | mii-na                   | 理由     | ミルノデ                       | mi(i)r-u-kii             |  |
| 願望 1  |    | ミタイ       | mii-pIsaN                | 理由過去   | ミタノデ                       | mii-dara                 |  |
| 願望 2  |    | ミタイ       | mii-tahaN                | 譲歩     | ミテモ                        | mi(i)r-a-baN             |  |
|       |    |           |                          | 否定譲歩 1 | ミナクテモ                      | mu-u-naa=teN             |  |
|       |    |           |                          | 否定譲歩 2 | ミナクテモ                      | mu-u-N-tiN <sup>23</sup> |  |

不規則変化動詞について説明する。カ変の k-u(u)-N (来る) とサ変の  $\phi$ -u(u)-N (する) である。非過去形では, k-u-N (来る) と  $\phi$ -u-N (する) とも言える。しかし, 否定接辞-nu が後接するときは, k-uu-nu (来ない) と h-aa-nu (しない) となり, 語幹形成母音が 2 モーラ分必要となる。また,  $\phi$ -u(u)-N (する) では語幹の  $\phi$ - と s-の交替が見られる。s-になるのは, 語幹形成母音 /I/ が続くときである。また, カ変とサ変の過去形式では, 語幹形成母音が 1 モーラでよい。そのため, 過去形式は, カ変で k-I-ta で, (58) のようにサ変で s-I-ta となる。理由過去も k-I-tara (来たので), s-I-tara (したので) と, 1 モーラでよい。なぜ, 過去接辞のみ語幹形成母音が 1 モーラでよいかは, 現時点で不明である。また, 強変化動詞や弱変化動詞では過去接辞は-da であるが, カ変とサ変では-ta になる。この仕組みも, 現時点では不明である。

<sup>23</sup> mu-u-N-tiN は mu-u-N-teN ではないかという話者もいる。tiN と teN の形態素分析は不十分な状況である。

- (58) *taru=Ndu s-I-ta?*  
 誰=NOM.FOC する-THM-PST  
 誰がした？

次に、屈折形式の機能として、特記すべき点を述べる。まず、不定形は、強変化動詞では連用形 2、弱変化動詞では連用形に相当し、それだけで文終止用法を持つ。その際、(59)=(34) のように過去のテンスを表す。

- (59) *juubi ami=ba φu-i suturehee=nu patee=gee har-i.*  
 ゆうべ 雨=ACC 降る-SEQ べちゃべちゃ=GEN 畑=ALL 行く-INF  
 ゆうべ雨が降り、べちゃべちゃの畑へ行った。

また、已然形-ja に-N が後接する形式で文終止ができる場合がある。ただし、この形式は言えない話者もいるため、文終止形式として表 11 には入れていない。例えば、*kak-uN* (書く) であれば、この形式は *kak-ja-N* となる。この形式には「確実」の用法がある。例えば、(60) のように「誰もしないなら、自分が確実にしますよ」のように使用できる。無生物主語でも可能で、「この木は花が咲くのか」と問われたときに、自分が確実に知っていたなら、(61) のように「(花が) 咲くよ」と答えることができる。

- (60) *baa h-ja-N=juu.*  
 私 する-RLS-DEF=SFP  
 「私がしますよ。」

- (61) *sak-ja-N.*  
 咲く-RLS-DEF  
 「(この木には花が) 咲くよ。」

また、動詞の中には補助動詞になると、異なる意味を持つ語がある。補助動詞とは、別の動詞に後接したとき、本動詞のときとは異なる意味や機能が生じる動詞のことである。例えば、本動詞の *mi(i)r-uN* (見る) には「経験」の意味はなく、(62) の「そうしていたら痛い目をみるよ」では本動詞 *mi(i)r-uN* (見る) が使用できない。だが補助動詞になると、(63a) のように「経験」を表すようになる。また、否定形式では (63b) のように、現在における「未経験」を表す。

- (62) *jagati duu jam-ah-uN=di arag-I-da. ×mi(i)ruN*  
 もう少し 身体 病む-CAUS-NPST=QUOT 歩く-THM-PST  
 「もう少しで痛い目をみるところだった。」



(63) a.  $\phi a-i$   $m-eN$ .  
 食べる-SEQ 見る-PFV.NPST  
 「食べたことがある。」

b.  $meeda$   $mii$   $m-uu-nu$ .  
 まだ 見る.SEQ 見る-THM-NEG  
 「まだ見たことがない。」

次に、古典のハ行四段動詞（現代共通語のワ・ア行五段動詞）由来の動詞について、屈折形式をまとめる（表 19）。

表 19 古典ハ行四段由来動詞の文末終止の屈折形式（該当する形式がない場合は一で表す）

|       |    | 語幹末 a-1<br>ka-/kai-<br>「買う」 | 語幹末 a-2<br>aara-/aarai-<br>「洗う」 | 語幹末 a-3<br>$\phi a$ -/ $\phi ai$ -<br>「食う」 | 語幹末 u-1<br>nu-/nui-<br>「縫う」 | 語幹末 u-2<br>umu-/umui-<br>「思う」 |
|-------|----|-----------------------------|---------------------------------|--|-----------------------------|-------------------------------|
| 非過去   | 肯定 | ka-uN                       | aar-oN                          | ho-oN<br>$\phi a$ -uN                      | nu-uN                       | umo-oN                        |
|       | 否定 | ka-a-nu                     | aara-a-nu                       | $\phi a$ -a-nu                             | no-o-nu                     | umo-o-nu                      |
| 過去    | 肯定 | ka-u-da<br>ko-o-da          | aaro-o-da                       | ho-o-da                                    | no-o-da                     | umo-o-da                      |
|       | 肯定 | kai                         | aarai                           | $\phi ai$                                  | nui                         | umui                          |
|       | 否定 | ka-a-naa-da                 | aara-a-naa-da                   | $\phi a$ -a-naa-da                         | nu-u-naa-da                 | umo-o-naa-da                  |
| 完了    | 肯定 | kai-ta                      | aarai-ta                        | $\phi ai$ -ta                              | nui-ta                      | umui-ta                       |
| 断言・勧誘 |    | ka-a                        | aara-a                          | $\phi a$ -a                                | no-o                        | umo-o                         |
| 命令 1  |    | kai-ja                      | aarai-ja                        | $\phi ai$ -ja                              | nui-ja                      | umui-ja                       |
| 命令 2  |    | ka-i                        | aara-i                          | $\phi a$ -i                                | nu-i                        | umu-i                         |
| 禁止    |    | kai-na                      | aarai-na                        | $\phi ai$ -na                              | nui-na                      | umo-o-na                      |
|       |    | ka-u-na                     | aaro-o-na                       | ho-o-na                                    | no-o-na                     |                               |
| 願望 1  |    | kai-pIsaN                   | aarai-pIsaN                     | $\phi ai$ -pIsaN                           | nui-pIsaN                   | umui-pIsaN                    |
| 願望 2  |    | kai-tahaN                   | aarai-tahaN                     | $\phi ai$ -tahaN                           | nui-tahaN                   | umui-tahaN                    |

通時的には、強変化動詞と同じ屈折形式を取ることが予測される。しかし、現在は母音語幹となっている。例えば「買う」を例にあげると、歴史的には、\*ka $\phi$ ->\*kaw->ka-と変遷したことが想定される。語幹末母音は a となっており、非過去肯定接辞-uN が後接すると、(64a) のように ka-uN となる。a-u は形態音韻規則が生じこともあり、「食べる」では、(64b) のように、 $\phi$ (h)o-oN とな

る。よって、a-u と o-o は共時的には両形式が可能なのだと考える。「思う」のように umu-と語幹末母音が u となる場合、(64c) のように u-u は o-o となり、umo-oN (思う) となる。

- (64) a. a-u → a-u (買う ka-uN)  
 b. a-u → o-o (食う \*kura-uN > φa-uN > φ(h)o-oN)  
 c. u-u → o-o (思う \*umu-uN > umo-oN)

また、ho-oN (降る) は、元は\*φur-uN だったと考えられるが、\*φur-uN > \*φu-uN となり、語幹末母音が u となった後に、ho-oN となったのではないかと考えられる<sup>24</sup>。「食う」と「降る」はどちらも ho-oN であるが、アクセントが異なり、「食う」は ho]-oN のように下がり目があるが、「降る」は下がり目がなく ho-oN と平らに発音される（ここでは.....で平らなアクセントを表す）。

否定接辞-nu の場合でも、語幹末母音と語幹形成母音で母音連続が生じることになるため、語幹末母音が a-か u-かで、(65) のように共時的な形態音韻規則が生じる。

- (65) a. a-a → a-a (買わない ka-a-nu → ka-a-nu)  
 b. u-a → o-o (縫わない nu-a-nu → no-o-nu)

強変化動詞では、語幹形成母音 /I/ があつたが、-I は他の母音との連続を許さないのではないかと考える。そのため、過去接辞に続く場合の-I-da は、語幹形成母音-I が-u となり (66a) のように a-u となったのではないかと考えられる。さらに a-u は共時的に o-o ともなるため、(66b) ともなる。語幹末母音が u-では、u-I の母音連続が許されず、語幹形成母音-I は-u となったと考えられ、さらに u-u は、(66c) のように o-o となる。

- (66) a. ×a-I → a-u (買った ×ka-I-da → ka-u-da)  
 b. ×a-I → a-u → o-o (洗った ×aara-I-da → aaro-o-da)  
 c. ×u-I → u-u → o-o (思った ×umu-I-da → umo-o-da)

だが、すべての場合で-I が-u になるなら、願望では、×kau-pIsaN となるはずだが、(67) のように kai-pisaN となる。これは、母音語幹になったため、弱変化動詞と同じ屈折形式も持つようになったのではないかと考える。例えば、ka-uN (買う) の語幹は、強変化動詞由来の ka-と、弱変化動詞の語幹 2 に相当する kai-の両形式が混在しているのではないかと、現時点では考えている。そのため、禁止形式では、(68) のように、強変化動詞由来と弱変化動詞由来の両方の屈折形式を取ることが可能である。とはいえ、禁止形式では、語彙によって、どちらかの形式の方が使いやすいという場合もあり、この区別に関しては、さらなる調査が必要である。

<sup>24</sup> \*φur-の r が落ちて\*φu-となった可能性と、\*φur > φ となった可能性がある。ho-oN (降る) の禁止形は φui-na と ho-o-na の両形式がある。

- (67) 強変化動詞由来 ×ka-I → ×ka-u (買いたい ×ka-I-pIsaN → ×kau-pIsaN)  
 弱変化動詞由来 kai (買いたい kai-pIsaN)
- (68) a. 強変化動詞由来 ×ka-I → ka-u (買うな ×ka-I-na → ka-u-na)  
 弱変化動詞由来 kai (買うな kai-na)
- b. 強変化動詞由来 ×aara-I → ×aara-u → aaro-o (洗うな ×aara-I-na → aaro-o-na)  
 弱変化動詞由来 aarai (洗うな aarai-na)
- c. 強変化動詞由来 ×nu-I → ×nu-u → no-o (縫うな ×nu-I-na → no-o-na)  
 弱変化動詞由来 nui (縫うな nui-na)

次に、非文末終止の屈折形式を示す（表 20）。

表 20 古典ハ行四段由来動詞の非文末終止の屈折形式

|        | 語幹末 a-1             | 語幹末 a-2                 | 語幹末 a-3             | 語幹末 u-1             | 語幹末 u-2               |
|--------|---------------------|-------------------------|---------------------|---------------------|-----------------------|
|        | ka-/kai-<br>「買う」    | aara-/aari-<br>「洗う」     | φa-/φai-<br>「食う」    | nu-/nui-<br>「縫う」    | umu-/umui-<br>「思う」    |
| 並列動作   | kai-taNnaa          | aarai-taNnaa            | φa-itaNnaa          | nui-taNnaa          | umui-taNnaa           |
| 目的     | kai-na              | aarai-na                | φai-na              | nui-na              | —                     |
| 並列     | kai-tarI            | aarai-tarI              | φai-tarI            | nui-tarI            | umui-tarI             |
| 継起     | kai                 | aarai                   | φai                 | nui                 | umui                  |
| 連体     | ka-u                | aaro-o                  | ho-o                | nu-u                | umu-u                 |
| 已然     | kai-ja              | aarai-ja                | φai-ja              | nui-ja              | umui-ja               |
| 仮定条件 1 | ka-u-ka             | aara-u-ka<br>aaro-o-ka  | ho-o-ka<br>φa-u-ka  | no-o-ka             | umo-o-ka              |
| 仮定条件 2 | kai-nee             | aarai-nee               | φai-nee             | nui-nee             | umui-nee              |
| 仮定条件 3 | ka-a-ba             | aara-a-ba               | φa-a-ba             | no-o-ba             | umo-o-ba              |
| 理由     | kai-kii<br>ka-u-kii | aarai-kii<br>aaro-o-kii | φai-kii<br>ho-o-kii | nui-kii<br>no-o-kii | umui-kii<br>umo-o-kii |
| 理由過去   | ka-u-dara           | aaro-o-dara             | ho-o-dara           | no-o-dara           | umo-o-dara            |
| 譲歩     | ka-a-baN            | aara-a-baN              | φa-a-baN            | no-o-baN            | umo-o-baN             |
| 否定譲歩 1 | ka-a-naa=teN        | aara-naa=teN※           | φa-a-naa=teN        | no-o-naa=teN        | umo-o-naa=teN         |
| 否定譲歩 2 | ka-a-N-tiN          | aar-a-N-tiN             | φa-a-N-tiN          | no-o-N-tiN          | umo-o-N-tiN           |

※ B 氏は aara-naa=teN というが、C 氏は ara-a-naa=teN と言う。B 氏では語幹形成母音がなく、C 氏では、語幹の音節が短くなるという特徴がある。

## 4.2 強変化動詞の音便形

強変化動詞の語幹末が-n, -m, -r のときに、表 21 のように音便が生じる。比較のために、否定形式を最初に記載する。sin-uN (死ぬ), num-uN (飲む), tur-uN (取る) の禁止接辞-na が後接するとき、いずれも sIN-na (死ぬな), nuN-na (飲むな), tuN-na (取るな) と撥音便化する。ただし、「飲む」は音便化しない形式もある。過去接辞-da が後接するとき、「死ぬ」「飲む」は、それぞれ siN-, nuN-と撥音便化するが、「取る」は tut-と促音便化する。ただし、音便化しない形式もある。「取る」のように語幹末が-r の場合、促音便化すると過去接辞-da は-ta となる。屈折接辞として過去接辞-da と完了接辞-ta があるが、num-uN (飲む) は、「過去」の nuN-da (飲んだ) と「完了」の num-i-ta (飲んだ) になり、-da と-ta の違いで表し分けている。「取る」の場合は、「過去」の tut-ta (取った) と「完了」の tur-i-ta (取った) となり、語幹が tut-か tur-i かの違いにより、「過去」か「完了」かを表し分けていると言える。また、語幹末子音が-m/-b の両形式を持つ「寝る」は、撥音便形を持つこともできるが、これは-mの影響だと考えられる。語幹末が-b の場合は音便化しない。例えば、kab-uN (かぶる) は音便化しない。

表 21 強変化動詞の音便形

| 語   | 語根    | 否定形式 -a-nu | 禁止形式 -I-na        | 過去形式 -I-da        |
|-----|-------|------------|-------------------|-------------------|
| 死ぬ  | sIn-  | sIn-a-nu   | sIN-na            | sIN-da            |
| 飲む  | num-  | num-a-nu   | num-I-na / nuN-na | num-I-da / nuN-da |
| 取る  | tur-  | tur-a-nu   | tuN-na            | tur-I-da / tut-ta |
| 眠る  | nim-/ | nim-a-nu   | nim-I-na / niN-na | niN-da            |
|     | nib-  | nib-a-nu   | nib-I-na          | nib-I-da          |
| かぶる | kab-  | kab-a-nu   | kab-I-na          | kab-I-da          |

## 4.3 派生形態論

### 4.3.1 ヴォイス

受身形は、強変化動詞の語幹と弱変化動詞の語幹 3 に、接辞-ar-が後接することで、(69) や (70) のように派生される。カ変とサ変では、語幹に-irar-が後接し、k-irar-iN (来られる), s-irar-iN (される) となる。この形式は、受身、可能、自発の用法がある。尊敬の用法はない。

(69) taroo=ja utudu=Nga=du bar-ar-i=coo.

太郎=TOP 弟=DAT2=FOC 殴る-PASS-INF=REP

「太郎は弟に殴られた。」

(70) bunee=Nga misikir-ar-i-ta.

母=DAT2 見つける-PASS-THM-PFV

「母に見つけられた。」

使役形は、強変化動詞の場合、語幹に接辞-ah-が後接する第一使役と、接辞-asimir-が後接する第二使役がある。-ah-のhは、語幹形成母音-Iが続くときsとなる。自動詞では通常、(71)のように第一使役-ah-を用いる。共通語では、使役の意味として「強制」と「放任／許可」があるが、どちらの意味も第一使役-ah-で表せる。第二使役-asimir-も使用はできるようだが、あまり使わないという。意味としては、ほぼ同じであると判断する話者と、-asimir-を用いる方が相手への強制性が高まると判断する話者がいる。

(71) a. *taroo=ja oomaa h-ii-ru utudu=ba um-as-I-ta.*  
 太郎=TOP 不愉快.ROOT する-THM-PROG 弟=ACC 泳ぐ-CAUS-THM-PST  
 「太郎は嫌がる弟を泳がせた（強制）。」

b. *taroo=ja utudu=ba kImu=nu φug-uN=keN um-as-I-ta=dara.*  
 太郎=TOP 弟=ACC 心=NOM 満ちる-NPST=LMT 泳ぐ-CAUS-THM-PST=SPF  
 「太郎は弟に好きなだけ泳がせた（放任／許可）。」

他動詞では、第一使役形式を用いるか、第二使役形式を用いるかで構文が変わる。例えば、他動詞の *jum-uN* (読む) は、(72a) のように、主語「太郎が」と対象「本を」の二項が必要である。この文に使役主体「お母さんが」を新しい主語として増やすと、通常、(72b) のように第一使役の-ah-を用いる（このとき、第二使役-asimir-が使用できないわけではない）。しかし、「お父さんがお母さんに言って太郎に本を読ませる」のように、使役主体「お父さん」が第三者の使役主体を使って、何かをさせる場合は、(72c) のように、第二使役-asimir-を用いる（このとき、第一使役-ah-が使えないわけではない）。つまり、第一使役は、「使役主体が 動作主体に V (原動詞) + (さ) せる」と、項が三項になる場合に使用されやすく、第二使役は、「使役主体が 第三者の使役主体を使って 動作主体に 対象を V (原動詞) + (さ) せる」と、項が四項になる場合に使用されやすいと言える。

(72) a. *taroo=Ndu φuN=ju jum-u.*  
 太郎=NOM.FOC 本=ACC2 読む-ADNM  
 「太郎が本を読む。」

b. *bunee=Ndu taroo=gee φuN=ju jum-ah-u.*  
 母=NOM.FOC 太郎=DAT 本=ACC2 読む-CAUS-ADNM  
 「母が太郎に本を読ませる。」

c. *bugee=Ndu bunee=gee iz-i-te taroo=gee φuN=ju jum-asimir-u.*  
 父=NOM.FOC 母=ALL 言う-SEQ=CP 太郎=DAT 本=ACC2 読む-CAUS2-ADNM  
 「父が母に言って、太郎に本を読ませる。」

項の数がともに三項で、第一使役と第二使役を用いた場合、第二使役を用いる方が使役主体の強制性が強く感じられるという。例えば、自動詞 *tur-uN* (取る) から派生した第一使役の *tur-ah-uN* (取らす) と、第二使役 *tur-asimir-uN* (取らせる) の違いを述べる。(73a)の *tur-ah-uN* (取らす) は、動作主体である孫の意向が反映されているニュアンスがある。使役主体である祖父が強制したわけではなく、むしろお金を援助して応援したということも考えられる。そのため、許可として解釈することも可能である。(73b)の *tur-asimir-uN* (取らせる) は、使役主体である祖父の意向が反映され強制のニュアンスが出てくる。よって、使役主体の使役性を強く表すのは、第二使役-*asimir-*だと言える。

(73) a. *accee=Ndu maa=gee meNkjo tur-ah-uN.*  
 祖父=NOM.FOC 孫=ALL 免許 取る-CAUS-NPST

「祖父が孫へ免許を取らせた。」

b. *accee=Ndu maa=gee meNkjo tur-asimir-uN.*  
 祖父=NOM.FOC 孫=ALL 免許 取る-CAUS2-NPST

「祖父が孫へ免許を取らせた。」

弱変化動詞では、語幹 2 に第二使役の-*simir-*が後接することで使役形が派生される。例えば、*hi(i)r-uN* (くれる・やる) であれば、語幹 2 の *hii-*を用い、(74a) のように *hii-simir-uN* となる。また、*kui-r-uN* (越える) では、語幹 2 の *kui-*に-*simir-*が後接し *kui-simir-uN* (越えさせる) となるが、(74b) のように *k-oo-simir-uN* (越えさせる) を用いることもできる。*k-oo-simir-uN* だと、語幹 1 と語幹形成母音の-*oo-*を用いることになるが、他の語でも語幹 1 で使役が派生できるのかという点に関しては未調査である。

(74) a. *bugee=Ndu bunee=gee iz-i=te taroo=gee otosidama hii-simi-da.*  
 父=NOM.FOC 母=ALL 言う-SEQ=CP 太郎=DAT お年玉 やる-CAUS2-PST

「父が母に言って、太郎にお年玉をあげさせる。」

b. *Nma=gee jama=ju {k-oo-simir-uN / kui-simir-uN}.*  
 馬=DAT 山=ACC2 {越える-THM-CAUS2-NPST / 越える-CAUS2-NPST}

「馬に山を越えさせる。」

また、弱変化動詞の一部では、語幹 3 に-*ah-*が後接して使役形を派生することができる。例えば、*ukir-uN* (起きる) は、通常は *uki-simir-uN* (起きさせる) だが、*ukir-ah-uN* (起きさせる) とも言える。自動詞と他動詞との関係も考慮する必要があり、意味の違いについては今後の課題である。

カ変「来る」の使役形「来させる」は、「語幹-語幹形成母音-第二使役」形式を取り、*k-ii-simir-uN* となる。だが、別形式で *kis-asimir-uN* (来させる) とも言える。さらに、滅多に使わないということが、(75) のように第一使役を用いて *k-u-uh-uN* (来させる) と言うこともできる。その際、

第一使役の-ah-形式は-uh-となり，語幹形成母音-uが必要となる。k-u-uh-uN（来させる）は，条件を整えて来てもらうという意味となる。しかし，そもそも「来させる」自体が言いにくく，通常はjar-ah-uN（遣らす）を用いる。サ変「する」の使役形「させる」は，動詞の語幹を用いなくて，simir-uNのみを用いる。

- (75) *jadiN hanako=ju k-u-uh-a-ba=du jar-u.*  
 絶対に 花子=ACC2 来る-THM-CAUS-THM-COND=FOC COP-ADNM  
 「絶対に花子を来させないといけない。」

當山（2013）には，首里方言に二重の使役関係を表す，第三使役があることが指摘されている。第三使役の文は，「使役主体が「第三者が対象に動作をさせる」ことをさせる」という構造を持つ。第三使役の形式は，第二使役に第一使役を後接して派生されるという。この形式は，宮良方言にはない。通常，(76a)のように引用文となる。第三使役は，四項取ることになるので，(76b)のように第二使役-asimir-を用いて表すことができる。ただし，「弟に」の部分は，「弟に言って」などと言う方がよく，utudu=gee（弟に）だけでは言いにくいという指摘がある。

- (76) a. *taroo=Ndu utudu=gee iN=gee munu=ba φa-ah-i=di iz-I-da.*  
 太郎=NOM.FOC 弟=ALL 犬=DAT もの=ACC 食う-CAUS-IMP=QUOT 言う-THM-PST  
 「太郎は弟に，「犬にごはんを食べさせろ」と言った。」  
 b. *taroo=Ndu utudu=gee iN=gee munu=ba φa-asimi-da.*  
 太郎=NOM.FOC 弟=ALL 犬=DAT もの=ACC 食べる-CAUS2-PST  
 「太郎は弟に，犬にごはんを食べさせた。」

#### 4.3.2 アスペクト

アスペクト接辞として，現在進行の-i-ru，過去進行の-i-da，現在結果の-eer-u，過去結果の-ee-daがある。伊豆山（1999a, 2002a, 2002b, 2005）や，Davis（2016）の研究があるが，弱変化動詞や変格活用の形態に関しての記述が少ないので，本稿で追加する。アスペクトの派生形式を動詞の屈折タイプごとにまとめた（表 22）。

強変化動詞には，語幹に，現在進行の-i-ru，過去進行の-i-da が後接するが，このときの-i は，元々は連用形 2 の語幹形成母音だと考える。弱変化動詞では，語幹 2 に，現在進行では-ru，過去進行では-da が後接する。

-eer-u は，強変化動詞では語幹に後接する<sup>25</sup>。弱変化動詞では，語幹 3 の音節構造によって語幹が異なる。語幹 3 に二重母音の-ii-や-ui-の重音節がなければ，語幹 1 に-eer-u が後接する。hi(i)r-uN（くれる・やる）の語幹 3 は hi(i)r-で，母音が 1 モーラの場合と 2 モーラの場合で揺れていた

<sup>25</sup> 古典の八行四段由来の動詞として，例えばka-u-n（買う）では，kai-ee-nとなるという（Davies2016: 189）。よって，弱変化動詞由来の語幹の方に後接すると言える。

が、この場合は語幹 1 に後接し、h-eer-u (くれた・やった) となる。一方、語幹 3 に 2 モーラの母音-ii-や-ui-の重音節があれば、語幹 2 に-eer-u が後接する。また、その際、語幹 3 に後接することも可能である。例えば、kuir-uN (越える) は、kui-eer-u (越えた) とも kuir-eer-u (越えた) とも言える。また、カ変とサ変では、語幹に後接し、k-eer-u (来た) や h-eer-u (した) となる。

表 22 動詞の屈折タイプごとのアスペクト形式

|       | 強変化動詞     | 弱変化動詞    |           |                         |                         | カ変      | サ変      |
|-------|-----------|----------|-----------|-------------------------|-------------------------|---------|---------|
| 語例    | 咲く        | 起きる      | くれる       | 酔う                      | 越える                     | 来る      | する      |
| 非過去   | sak-uN    | ukir-uN  | hi(i)r-uN | biir-uN                 | kuir-uN                 | k(u)-uN | h(u)-uN |
| 語幹    | 語幹        | 語幹 2     |           |                         |                         | 語幹      | 語幹      |
|       | sak-      | uki-     | hii-      | bii-                    | kui-                    | k-      | h-      |
| -i-ru | sak-i-ru  | uki-ru   | hii-ru    | bii-ru                  | kui-ru                  | k-ii-ru | h-ii-ru |
| -i-da | sak-i-da  | uki-da   | hii-da    | bii-da                  | kui-da                  | k-ii-da | h-ii-da |
| 語例    | 咲く        | 起きる      | くれる       | 酔う                      | 越える                     | 来る      | する      |
| 語幹    | 語幹        | 語幹 1     |           | 語幹 2 と 3                |                         | 語幹      | 語幹      |
|       | sak-      | uk-      | h-        | bii-/biir-              | kui-/kuir-              | k-      | h-      |
| -eeru | sak-eer-u | uk-eer-u | h-eer-u   | bii-eer-u<br>biir-eer-u | kui-eer-u<br>kuir-eer-u | k-eer-u | h-eer-u |

現在進行を表すときに、-i-ru 形式だけでなく、補助動詞 uru (いる) を用いて表すこともできる。(77a) と (77b) の違いは、「現在」という瞬間における行為の違いである。(77a) は、依頼された原稿を執筆中であるのは確かだが、「現在」はお茶を飲むなど、休憩している可能性がある。よって、-i-ru は一連の動作が継続中であることを表す。(77b) は、発話時の「現在」において書いていることを表す。その意味で現在進行形である。

- (77) a. taro=Ndu            geNkoo kak-i-ru.  
 太郎=NOM.FOC    原稿    書く -THM-PROG.ADNM  
 「太郎が原稿を書いている。」
- b. taro=Ndu            geNkoo kak-i        ur-u.  
 太郎=NOM.FOC    原稿    書く -SEQ    いる -NPST  
 「太郎が原稿を書いている。」

-eer-u は過去に起こった出来事を、現在推測している場面で使用される。(78) は、お年玉袋が落ちているのを見て、第三者が「お年玉をあげた」行為をしたのだらうと、推測している場面である。痕跡があつて、その痕跡から過去の行為を推測するとき使用しやすい。また、-eer-u は、



動詞だけでなく、(79) のように形容詞の語幹に=du が後接して、ar-u を屈折形式として用いるときも使用される。

- (78) *taru-Ngasa h-eer-ja-N=na.*  
 誰-INDF やる-PFV-RLS-DEF=SFP  
 「誰か（お年玉を）あげたんだな。」

- (79) *tsunaha=du ar-eer-u=na.*  
 幼ない=FOC COP-PFV-ADNM=SFP  
 「（私達は）幼なかったね。」

アスペクト形式として、他にも接辞の-daru, -duru がある。これは、元々、「=du aru」だったものが-daru に、「=du uru」であったものが-duru になったと考えられる。-daru は物や事柄の状態を表すため、(80) のように連体修飾語として使用されることもできる。一方、-duru は動作動詞の継続や瞬間動詞の結果や状態を表すため、(81) のように文末で使用されることが多い。

- (80) *Nga sik-ee-daru hatsaN=ja taa=du muc-i hat-ta?*  
 ここ.LOC 置く-PFV-RESL はさみ=TOP 誰=FOC 持つ-SEQ 行く-POST  
 「ここに置いてあったはさみは誰が持っていった？」

- (81) *ure=e jagi-duru.*  
 これ=TOP 痩せる-STAT.NPST  
 「こいつ（この牛）は痩せているね。」

他にも、伊豆山（2002a）は「生起型不定形+soo」と呼び、目の前の出来事を表す形式があることを指摘する（伊豆山 2002a: 393）。実際、動作動詞の不定形に soo が後接すると、(82) のように現在進行を表すことを確認した。これは目の前にいる子供の様子を説明している場面である。伊豆山（2002a）では、モダリティとの関連も含まれていることが指摘されており、不定形の機能なのか、soo の機能なのか、今後、検討する必要がある。

- (82) *unu φaa=ja φutsI=ba ak-i nim-i=soo.*  
 この 子供=TOP 口=ACC 開ける-SEQ 寝る-INF=SFP  
 「この子は口を開けて寝ているよ。」

また、完了を表す neenu もある。(83) のように「～してしまった」という場合に使用される。

- (83) *atabutsuni sik-u-kii basiki-neenu.*  
 急に 聞く-THM-CSL 忘れる-PFV

急に聞くから忘れてしまった。

### 4.3.3 ムード

動詞の活用接辞で表す勧誘・禁止・命令（動詞活用の表 11 参照）とは別に、ムードを表す形式について述べる。共通語では、「～ようだ」相当の助動詞相当語が予測されるが、助動詞だけでなく、助詞や構文で言い表されるものもある。そのため、共通語訳とともに、直訳を（ ）に入れて示すことにする。

#### ①様態「～そうだ」

(84) *pana=nu sak-uN={kisjaaru / kisjaaN / kisjaa=soonaa}*.

花=NOM 咲く-NPST={SEEM / SEEM / SEEM=SFP}

「花が咲きそうだ。」

#### ②推量「～だろう」

(85) の *hazI* (はず) は、元々名詞であるため、前接動詞は連体形-*u* であることが予測されるが、終止形の-*uN* も可能である。*sak-u=hazI* と *sak-uN=hazI* では確信性の程度が異なり、-*uN* を用いる方が高い確信性を持っていることを表せる。例えば、月下美人のつぼみを見ながら「今晚あたり、咲くかな」と聞かれ、間違いなく今晚咲くだろう、と思った場合には、*sak-uN=hazI* が使用できる。*hazI* は名詞の性質も残しているが、一方で終助詞化していると考えられる。

(85) *{sak-u / sak-uN}=hazI*.

{咲く-ADNM / 咲く-NPST}=LCTN

「咲くだろう。」

#### ③否定推量「～ないだろう」

(86) *sak-uN=kisjaN neenu*.

咲く-NPST=SEEM ない

「咲かないだろう（咲きそうでない）。」

#### ④確信「～にちがいない」

(87)=(85) *{sak-u / sak-uN}=hazI*.

{咲く-ADNM / 咲く-NPST}=LCTN

「咲くだろう。」

(88) *sak-uN ar-a-nu?*

咲く-NPST COP-THM-NEG

「咲くだろう（咲くのでないか）。」

(89) *sak-i=ga=ja*

咲く-INF=SFP=SFP

「咲くだろう（咲くに決まっているよ）。」

⑤推定「～ようだ」

(90) *k-I=soo=tanaa=di=du*                      *niir-ja-N.*

来る-INF=NMLZ=INFR=QUOT=FOC 似る-RLS-DEF

「来るような感じだね（来るように似ている）。」

⑥希望

(91)(92)で用いられている *hi(i)r-uN*（くれる・やる）は、授与動詞である。実在する物を授受する場合は、受益者の項として=geeを必要とするが、このように希望を表す用法の場合は、受益者の項を取ることができない。

(91) *sak-i*              *hi(i)r-jaa=naa.*

咲く-SEQ くれる-RLS=SFP

「咲いて欲しい（確実に咲いてくれるよね）。」

(92) *sak-i*              *hi(i)r-u-ka=naa.*

咲く-SEQ くれる-THM-COND=SFP

「咲いて欲しい（咲いてくれたらな）。」

⑦禁止

(93) *ϕa-i=ja*                      *nar-a-nu=dara.*

食べる-INF=TOP なる-THM-NEG=SFP

「食べてはいけない（食べるのはならないよ）。」

(94) *ho-o-ka*                      *ikanu<sup>26</sup>.*

食べる-THM-COND いけない

「食べてはいけない（食べたらいけない）。」

⑧可能性

(95) *ho-oN=ju*                      *bagar-a-nu.*

食べる-NPST=INDF 分かる-THM-NEG

「食べるかもしれない（食べるか分からない）。」

<sup>26</sup> 動詞の\**ik-uN*が想定されるが、現時点で見つかっていないので、語幹と派生接辞に分けていない。

⑨義務

(96) *φa-a-naa-ka*                      *nar-a-nu.*  
 食べる-THM-NEG-COND    なる-THM-NEG  
 「食べなければならない（食べなかったらならない）。」

(97) *φa-a-ba=du*                      *jar-u.*  
 食べる-THM-COND=FOC    COP-ADNM  
 「食べなければならない（食べたらずである）。」

4.3.4 待遇

敬語を用いる対象は、自分より年長者の人である。年齢による序列づけは宮良方言において絶対的な指標である。社会的地位も考慮はされるが、絶対的ではない。共通語のような人称制約がないため、共通語の尊敬語や謙譲語の機能とは異なる点が多々ある。荻野(2011, 2018, 2019, 2020b)で、基本的な体系は「敬意優先の体系」であることを指摘し、敬意の方向を重視することを述べた。敬意の方向を重視するとき、一人称も序列の中で相対的に位置づけられるため、下位者に対して、一人称が上位者になることも文法的に許容される。結果として、自分を高く位置づける自敬を許容する場合もある。主語を高める語を尊敬語、補語を高める語を謙譲語とし、敬語一覧を示す(表 23)。荻野(2018)では、宮良方言の謙譲語は補語を高めるとともに、主語を高める機能もあるため、謙譲語<sup>アルファ</sup>αと呼ぶことを提案した。

表 23 敬語一覧

|      |                   |                           |                       |
|------|-------------------|---------------------------|-----------------------|
| 本動詞  | 尊敬語               | oor-uN                    | いらっしゃる (行く,来る,いるの尊敬語) |
|      |                   | taboor-uN                 | 賜る・下さる                |
|      |                   | Nkooor-uN                 | 召し上がる                 |
|      |                   | ujooohoor-uN              | 召し上がる                 |
|      | 謙譲語<br>α          | ujoooh-uN                 | 差し上げる                 |
|      |                   | ssari-(ru)N               | 申し上げる・お伝えする           |
|      |                   | sikeeh-uN                 | お連れする・ご案内する           |
|      |                   | kujoom-uN                 | お願いする・お目にかかる          |
|      |                   | taboor-uN・taboorari-(ru)N | 頂く                    |
| 補助動詞 | 尊敬語               | 動詞語幹-oor-uN               | ～なさる                  |
|      | 謙譲語 <sup>27</sup> | 動詞連用形 2 ujoooh-uN         | ～差し上げる                |
|      |                   | 動詞連用形 2 ssari-(ru)N       | ～申し上げる (「言う」「する」が主)   |
|      |                   | 動詞連用形 2 ooh-uN            | ～差し上げる                |

<sup>27</sup> 補助動詞の謙譲語に関して、補語を高める機能は確認しているが、主語に関しては未確認のため、謙譲語αと記載していない。

謙讓語  $\alpha$  は、主語と補語の両方の人物を高めることが可能なので、例えば、祝賀会で知事がおじに花束の贈与を行ったことを、(98) のように言える。この場合、知事もおじも同程度に高めている。また、謙讓語  $\alpha$  は、尊敬語を補助動詞として後接し、二方面敬語を形成することもできる。

- (98) *cizi=Ndu*            *baa buzasa=gee*   *hanataba*   *ujooh-uN=coo*.  
 知事=NOM.FOC   私 おじ=DAT   花束   差し上げる-NPST=REP  
 「知事が私のおじに花束を差し上げるそうだ。」

補助動詞での尊敬語の形式は、強変化動詞では、(99a) のように語幹に-*ooruN* を後接させる。この場合のテンスは未来を表す。弱変化動詞では(99b)(99c)(99d)のように、語幹 1 に-*ooruN* が後接する場合と、(98e) のように、語幹 2 に、-*j*-を介在して-*ooruN* が後接する場合がある。アスペクトとして、「～していらっしゃる」と現在進行を表す場合には、動詞の連用形 2 に補助動詞 *ooruN* を用いる。弱変化動詞では、語幹 2 に補助動詞 *ooruN* を用いる形式になる。例えば、*biir-uN* (酔う) だと、*bii ooruN* (酔っていらっしゃる) となる。(99) の形式は、テンス・アスペクトに関しては未確認のことが多いため、今後、調査が必要である。

- (99) a. *kak-uN* (書く)        → *kak-ooruN* (お書きになる)  
 b. *ukir-uN* (起きる)      → *uk-ooruN* (お起きになる)  
 c. *mi(i)r-uN* (見る)        → *m-ooruN* (ご覧になる)  
 d. *biir-uN* (酔う)         → *bj-ooruN* (お酔いになる)  
 e. *kuir-uN* (越える)        → *kui-jooruN* (お超えになる)

補助動詞の謙讓語の「～して差し上げる」は、一般動詞の連用形 2 と補助動詞 *ujooh-uN* で表す。*ooh-uN* も「～して差し上げる」の意味で用いられるが、動詞の連用形 2 と *ujoohuN* よりも、軽い敬意を表すとされる。ちなみに、*ooh-uN* は補助動詞のみで用いられ、本動詞の用法はない。

また、自然物の中で「雨」や「月」に対して尊敬語を用いることがある。月の場合、満月に近い、十三夜から十六夜の月が美しいときに (100) のように言える。なお、「月」に接尾辞の-*NganasI* は、「可愛い」や「愛らしい」等の親愛の情を表す。「お月様」と意識したが、尊称「様」とは異なる。太陽や星や雷には、-*ganasI* はつかない。

- (100) *tsIkI+N+ganasI=nu*   *nubur-oor-i=coo*.  
 月+GEN+HON=NOM   上る-HON-INF=REP  
 「お月様がお上りになったね。」

#### 4.4 存在動詞

存在動詞は無生物では ar-uN を、有生物では ur-uN を用いる (表 24)。ar-uN の否定としては、形容詞の neenu が用いられる。ar-a-nu は用いない。ちなみに ar-a-nu は、コピュラ jar- の否定としては用いられる。

表 24 存在動詞の動詞活用表

|        |    | (金が) ある |            | (孫が) いる |            |
|--------|----|---------|------------|---------|------------|
|        |    | 共通語訳    | 無生物存在      | 共通語訳    | 有生物存在      |
| 非過去    | 肯定 | ある      | ar-uN      | いる      | ur-uN      |
|        | 眼前 | ある      | ar-jaN     | いる      | ur-jaN     |
|        | 眼前 | ある      | as=soo     | いる      | us=soo     |
|        | 否定 | ない      | neenu      | いない     | ur-anu     |
| 過去     | 肯定 | あった     | at-ta      | いた      | ut-ta      |
|        | 否定 | なかった    | neena-a-da | いなかった   | ur-anaa-da |
| 継起     |    | あって     | ar-i       | いて      | ur-i       |
| 連体     |    | ある      | ar-u       | いる      | ur-u       |
| 已然     |    | あるから    | ar-jaa     | いるから    | ur-jaa     |
| 仮定条件 1 |    | あったら    | ar-u-ka    | いたら     | ur-u-ka    |
| 仮定条件 2 |    | あったら    | ar-i-nee   | いたら     | ur-i-nee   |
| 仮定条件 3 |    | あるなら    | ar-a-ba    | いるなら    | ur-a-ba    |
| 譲歩     |    | あっても    | ar-a-baN   | いても     | ur-a-baN   |
| 理由 1   |    | あるから    | ar-u-kii   | いるから    | ur-i-kii   |
| 理由 2   |    | あるから    | ar-i-ri    | いるから    | ur-i-ri    |
| 理由過去   |    | あったから   | at-tara    | いたから    | ut-tara    |

#### 4.5 可能動詞

可能を表す接辞には、接辞-ar-の他に、-busuN, -siiN がある (表 25) 。-ar-は状況可能で使用される。-busuN は能力可能で使用される。-siiN も能力可能を表し、「おまえは書けないというが、自分は書くことができるよ」のようなニュアンスがあるという。

表 25 可能を表す接辞

|        | 強変化動詞<br>「書く」 | 弱変化動詞<br>「見る」 | カ変<br>「来る」 | サ変<br>「する」 |
|--------|---------------|---------------|------------|------------|
| 状況可能   | kak-ar-iN     | mir-ar-iN     | k-i-rar-iN | s-i-rar-iN |
| 能力可能 1 | kak-i-busuN   | mii-busuN     | k-ii-busuN | h-ii-busuN |
| 能力可能 2 | kak-i-siiN    | mii-siiN      | k-ii-siiN  | h-ii-siiN  |

## 5. 形容詞・コピュラ形態論

### 5.1 基本構造

伊豆山 (1997b, 2002a) は、宮良方言の形容詞が首里方言と異なることを主張する。その証拠の一つとして「(語幹の) 名詞的用法がない」ことをあげるが、「暑さが残っている」の場合、(101) のように言える。これは名詞的用法でないのか、今後、検討する必要があるのではないかと考える。

- (101) *at-tsa=Ndu*                      *nukur-i-ru.*  
暑さ-NMLZ=NOM.FOC 残る-THM-PROG.ADNM  
「暑さが残っている。」

形容詞の接辞として、-ha-N と -he-N と -ho-N の形式がある。この中では、-ha-N 形式が最も多い。そのため、-ha-N が基本的な形式だと考える。伊豆山 (1996, 2002a) が指摘するように、接辞が -ha-N となっている形容詞は語根末の母音の影響を受けて (102b) や (102c) のように母音が変化する。ただし、伊豆山 (2002a) では、*karu-ho-N* (軽い) となっているが、今回調査した範囲では *karo-ho-N* (軽い) と、語根 *karo-* の末母音は *o-* であった。語根末母音が *u* の場合は、*o* に変化しやすいのかもしれない。同様に、語根末の *i* も *e* に変化しやすい可能性がある。「嬉しい」は、隣接する石垣方言で *sani-sjaa-N* (嬉しい) と言う。語根 *sani-* の末母音は *i* で安定している。宮良方言では *sane-he-N* (嬉しい) となり、語根 *sane-* の末母音は *e* である。これは、\**sani-* が -he-N の影響を受けて *sane-* となった可能性が考えられる。このように、語根末母音が接辞母音が調和し、*e* や *o* になる傾向があるのではないかと考える。

また、-ha-N 以外の接辞を持つ形容詞も (103) のように若干ある。

- (102) a. 語根末母音 -a            → -a-ha-N (*kana-ha-N* 愛しい)  
b. 語根末母音 -i / -e        → -e-he-N (*kai-he-N* 美しい / *sane-he-N* 嬉しい)  
c. 語根末母音 -u / -o        → -o-ho-N (*karu-ho-N* 軽い / *bjoo-ho-N* かゆい)
- (103) a. -t-tsaN    (*at-tsa-N* 暑い・厚い)  
b. -φ-φaN    (*iφ-φa-N* 重い)  
c. -s-saN     (*umus-sa-N* 面白い)  
d. -saN       (*sII-sa-N* 酸っぱい)  
e. -sjaN      (*mi-sja-N* よい)  
f. 重複形式 (*kIN+kI-i* 黄色い)

形容詞の活用形式は表 26 の通りである。表 26 で分かるように、形容詞の全ての活用形は語根と後接する形容詞化接辞を基に形成されている (例: 「粗い」*ara-ha-N*)。また、-ha-N と対比す

るために、-tsa-N の活用もあげる。なお、以下の用例では、煩雑さを避けるため、特に必要がない場合は、形容詞化接辞の境界を示さない（例：「粗い」 araha-N）。

表 26 形容詞の屈折形式

|        |      | 共通語訳   | 粗い               | 接尾辞と屈折        | 暑い               |
|--------|------|--------|------------------|---------------|------------------|
| 非過去    | 肯定   | 粗い     | ara-ha-N         | -ha-N         | at-tsa-N         |
|        | 眼前   | 粗い     | ara-ha-daru      | -ha-daru      | at-tsa-daru      |
|        | 否定   | 粗くない   | ara-ha neenu     | -ha neenu     | at-tsa neenu     |
| 過去     | 肯定 1 | 粗かった   | ara-ha-a-da      | -ha-a-da      | at-tsa-a-da      |
|        | 肯定 2 | 粗かった   | ara-ha=du at-ta  | -ha=du at-ta  | at-tsa=du at-ta  |
|        | 否定   | 粗くなかった | ara-ha neenaa-da | -ha neenaa-da | at-tsa-neenaa-da |
| 継起     |      | 粗くて    | ara-har-i=te     | -har-i=te     | at-tsar-i=te     |
| 連体     |      | 粗い (物) | ara-har-u        | -har-u        | at-tsaar-u       |
| 已然     |      | 粗いから   | ara-har-ja       | -har-ja       | at-tsaar-ja      |
| 仮定条件 1 |      | 粗いなら   | ara-har-u-ka     | -har-u-ka     | at-tsar-u-ka     |
| 仮定条件 2 |      | 粗いなら   | ara-har-i-nee    | -har-i-nee    | at-tsar-i-nee    |
| 仮定条件 3 |      | 粗いなら   | (ara-har-a-ba)   | -har-a-ba     | at-tsar-a-ba     |
| 譲歩     |      | 粗くても   | ara-har-a-baN    | -har-a-baN    | at-tsar-a-baN    |
| 理由 1   |      | 粗いから   | ara-har-i-kii    | -har-i-kii    | at-tsar-i-kii    |
| 理由 2   |      | 粗いから   | ara-har-i-nee    | -har-i-nee    | at-tsar-i-nee    |
| 理由過去   |      | 粗かったから | ara-ha-dara      | -ha-dara      | at-tsa-dara      |

非過去の「肯定」と「眼前」の違いを述べる。「肯定」の (104) は話し手の感想を表すのに対し、「眼前」の (105) は眼前の現在の状態を表す。例えば、初心者が布を織ったとする。(104) の araha-N はその布を見たときの話し手の感想であるが、(105) の araha-daru は布を手にとって、布の状態を観察したときに使う。-daru は、=du aru と分析的にも言える。

(104) ure=e      araha-N.  
 これ=TOP      粗い-NPST  
 「これは粗い。」

(105) ure=e      araha-daru (araha=du ar-u).  
 これ=TOP      粗い-RESL (粗い=FOC ある-NPST)  
 「これは粗い (状態だ)。」



伊豆山 (2002a) では、過去肯定 1 の *-da* は「確認」、過去肯定 2 の *du at-ta* は「過去」と分析している。確かに、「確認」や「過去」いう考え方にも一理あると考える。*-da* は現在も認識が続いているので、(106) のように現在に近い過去で使用しやすく、*du at-ta* は、過去に認識したことを表すので、(107) のように現在から離れた過去のことを表しやすい。しかし、どちらもテンスとしては過去なので、本稿では過去とする。

(106) *kIno=o        attsaa-da*

昨日=TOP    暑い-PST

「昨日は暑かった。」

(107) *saNneN mai=ja     attsaa=du        at-ta*

三年    前=TOP    暑い=FOC    ある-PST

「三年前は暑かった。」

理由 3 の *-rja* は出来事が既に起こっている場合で使用されるため、已然形に相当すると考える。

(108) は、「初心者が織った布は品質がよくないから、購入するときは注意せよ」と友人に言う場合である。

(108) *araha-rja    kii    sikir-i*

粗い-RLS    気    つける-IMP

「粗いから気をつける。」

形容詞の文終止形式に関して、(109) のように *-nu* で終わることもある。話し手が一人で自分の状態の述べるときに使いやすい。

(109) *sjuugaku+rjokoo=di    iz-i-nee        natsukahaa-nu*

修学+旅行=QUOT    言う-THM-COND2    懐かしい-NPST

「修学旅行といえば懐かしいな。」

また、動詞の派生語としての形容詞的機能を持つ語（補助形容詞）に、*-NgureheN*（～しにくい）や、*-ttsaneheN*（～しやすい）がある。(110) は「食べにくい」、(111) は「書きやすい」の例である。また、名詞を形容詞化する接辞もある。接辞 *-haa* を後接することで、(112a) の名詞 *sairratu*（いんちき）は、(112b) で *saittaru-haa* / *saittaru-hoo*（ずるい）という形容詞になる。

(110) *φai-Ngurihee=du                          ar-u*

食べる-INF-しにくい=FOC    ある-NPST

「食べにくいよ。」

(111) *kunu peN=saare=e kak-i-ttsanehee=soona.*

この ペン=INST=TOP 書く-INF- しやすい=SFP

「このペンでは書きやすいよ。」

(112) a. *ure=e saittaru.*

それ=TOP いんちき

「それは（その試合は）いんちきだ。」

b. *ure=e saittaru-[haa/hoo]=joo.*

あいつ=TOP いんちき-ADJZ=SFP

「あいつはずるいよ（=いんちきな人だよ）。（*saittaru-ha-N* / *saittaru-ho-N* : 形容詞）」

## 5.2 品詞上の位置づけ

形容詞には、尊敬接辞もつけることができ、動詞に近い性質を有する。一方で、語根の独立性が強く、(113) のように語根のみで名詞修飾ができる性質も有する。ただし、語根での修飾は生産的にできるわけではなく、特定の語根か、複合名詞として特定の意味を持つ場合に限られるようである。例えば、(113b) の *koo+tsIburI* (男の子) は一語化していると考えられる。

(113) a. *ara-haN* (新しい)      *ara+kutsu* (新しい靴)

b. *koo-hoN* (固い)      *koo+tsIburI* (男の子, 直訳は「固い頭」<sup>28</sup>)

c. *taka-haN* (高い)      *taka+munu* (高価なもの)

## 5.3 コピュラ構文

「のだ」文に相当する拡張コピュラ構文は、宮良方言にない。また、形容動詞に相当する形式はなく、「元気だ」の場合には屈折接辞としてコピュラを用いる。伊豆山 (2002a) には、コピュラに関する記述があるが (伊豆山 2002a: 439-455), 形容動詞相当形式「元気だ」を名詞述語文と同じと考えてよいのか検証するために、コピュラの「学生だ」と比較した (表 27)。形容動詞相当形式とコピュラでは、連体形のみ異なる。「元気だ」は、*gaNzjuu φutu* (元気+人) のように、直接名詞が後接するのに対し、「学生だ」は、*gakusee=nu φuto* (学生の人) と格助詞=*nu* が必要となる。

伊豆山 (1998) では、*jar-uN* の活用の一つとして *juu* と *juN* をあげている<sup>29</sup>。「判断形」と呼び、現在の状態を「～だ」と表す用法であると説明されている。だが、気になる点がある。*juN* は一人称主語を許容しない。(114) のように一人称主語の場合は、*gaNzjuu=dara* (元気です) と言わなければならない。一人称を許容しない点は、伊豆山 (1998) では触れられていない。*juN* は、「はっ

<sup>28</sup> イメージとして男の子は女の子より固いからではないかという話者の解説である。一方で、女の子を「柔らかい+頭」と表すような語はない。

<sup>29</sup> 伊豆山 (1998) では与那国方言の *iruN* (する) の完了形を再建しており、\**i-a* と \**i-u* から、\**i-aN*>*jaN* (首里方言など)、\**i-uN*> *juN* (宮良方言など) が生じたのではないかと考えている。

と気づいたときや、予想と違っていたときに *juN* を使う」と説明する話者もいる。*juN* は *jaruN* と別の語である可能性がありそうだ。そのため、表 27 では、(*juN*) として記載することにした。

(114) *baa gaNzjuu=dara.*       $\times$  *gaNzjuu=juN*

私      元気=SFP.

「私は、元気ですよ。」

表 27 コピュラの活用形式

|        |    | (あの人は元気) である |  | (あの人は学生) である |  |
|--------|----|--------------|--|--------------|--|
|        |    | 現代語訳         | 形容動詞相当                                   | 現代語訳         | コピュラ                                     |
| 非過去    | 肯定 | 元気である        | <i>jar-uN</i>                            | 学生である        | <i>jar-uN</i>                            |
|        | 否定 | 元気でない        | <i>ar-a-nu</i>                           | 学生でない        | <i>ar-a-nu</i>                           |
| 断定※    |    | 元気だね         | ( <i>juN</i> )                           | 学生だね         | ( <i>juN</i> )                           |
| 過去     | 肯定 | 元気だった        | <i>jat-ta/dat-ta</i> <sup>30</sup>       | 学生だった        | <i>jat-ta/dat-ta</i>                     |
|        | 否定 | 元気でなかった      | <i>ar-anaa-da</i>                        | 学生でなかった      | <i>ar-anaa-da</i>                        |
| 継起     |    | 元気で          | <i>jar-i</i> {-ti/-tee}                  | 学生で          | <i>jar-i</i> {-ti/-tee}                  |
| 連体     |    | 元気な (人)      | = $\phi$ ( $\phi$ utu)                   | 学生である (人)    | =nu ( $\phi$ utu)                        |
| 連体過去   |    | 元気だった (人)    | <i>jar-eeru</i>                          | 学生だった (人)    | <i>jar-eeru</i>                          |
| 已然     |    | 元気だから        | <i>jar-jaa</i>                           | 学生だから        | <i>jar-jaa</i>                           |
| 仮定条件 1 |    | 元気なら         | <i>jar-u-ka</i>                          | 学生なら         | <i>jar-u-ka</i>                          |
| 仮定条件 2 |    | 元気なら         | <i>jar-i-nee</i>                         | 学生なら         | <i>jar-i-nee</i>                         |
| 仮定条件 3 |    | 元気なら         | <i>jar-a-ba</i>                          | 学生なら         | <i>jar-a-ba</i>                          |
| 理由 1   |    | 元気だから        | <i>jar-i-kii</i>                         | 学生だから        | <i>jar-i-kii</i>                         |
| 理由 2   |    | 元気だから        | <i>jar-i-ri</i>                          | 学生だから        | <i>jar-i-ri</i>                          |
| 理由過去   |    | 元気だったから      | <i>jat-ta-kii</i><br><i>jar-eeru-kii</i> | 学生だったから      | <i>jat-ta-kii</i><br><i>jar-eeru-kii</i> |

※ 一人称主語では使用不可である。

また、コピュラは、(115) のように単独で文頭で使用できる。肯定の *jar-uN* (である) でも、否定の *ar-a-nu* (ではない) でも文頭で使用可能である。共通語では相手の言葉を受けて肯定や否定を表すとき、「そうだ / そうではない」のように、指示副詞「そう」が必要である。むろん、「そう」に該当する *aNzi* を用いることも多いが、*aNzi* を用いるのは、軽く相づちをうつ場合が多い。相手の言葉を受けて、断定的に肯定したり、強く否定したりするときは、コピュラを用いる。

<sup>30</sup> *dat-ta* を D 氏と E 氏は日常的に用いるが、共通語が混入したものではないかという意識もある。

(115) *ar-a-nu=dara. taroo=Ndu kuzara=ju bar-eer-u.*

COP-THM-NEG=SFP 太郎=NOM.FOC 小皿=ACC2 割る-PFV-ADNM

「(小皿を割ったのは次郎かと聞かれて) そうではない。太郎が小皿を割ったよ。」

#### 5.4 丁寧

形容詞文もコピュラ文も、尊敬語化することができる。上位者と道で会ったときは、(116) のように挨拶をする。形容詞では、r 語幹に尊敬の補助動詞の-ooruN (～なさる) を後接する。コピュラでは、jar-に、補助動詞の-ooruN (～なさる) を後接し、(117)(=(23))のように用いる。

(116) *attsar-oo=soonaa.*

暑い-HON=SFP

「暑いですね (=暑くあられますね) 。」

(117) *ure=e waa munu=du jar-oor-u?*

これ=TOP あなた もの=FOC COP-HON-ADNM

「これは、あなたの物ですか (=あなたの物であられますか) ?」

#### 5.5 形容詞語根の重複形

形容詞の語根部分は重複して、述部となる。その際の形式は、単に語根を重複させるのではなく、前部要素は語根末の母音を1モーラ長くし、後部は語根に接辞-iがつく。-iについて、Davis (2017) は、形容詞化派生接辞と分析する。例えば、ama-ha-N (甘い) だと、amaa-ama-i という形式になる。ただし、母音が3モーラ続く音節は許されていないので、例えば、naa-ha-N (長い) だと、×naa-a naa-i ではなく、naa-na-i となる。ここで、注目したいのが、naa-na-i (長々) は、イントネーションの違いにより、二つの異なる意味が生じることである(荻野 2017)。従来、この二つの意味に関する指摘がない。しかし、八重山では竹富町の黒島方言にも、二つのイントネーションの違いによる意味の相違が見られるため、このようなイントネーションと意味の違いは、八重山地方に広く存在するのではないかと考える。

二つのイントネーションのピッチ曲線は、図3と図4の通りである。一つ目のイントネーションは、前部要素が高く始まり、後部要素で下降が見られる。この場合の意味は「思っていたよりも、少し～である」となる。naa-na-i (長々) を例としてあげると、(118a) のように「想定よりも少し長い」ことを表す。二つ目のイントネーションは、前部要素がきしみ声を含めて低く始まり、後部要素で少し浮き上がる。浮き上がる場合の記号を [ で表す。この場合の意味は「かなり～だ」という強調となる。そのため、このときの naa-na-i (長々) は (118b) のように、「かなり長い」という意味になる。この重複形式は、副詞的用法もある。例えば、反物をメートル単位で購入しようとするとき、店主に少しおまけをして欲しいと思えば、図3のイントネーションを用いると、「少し長めに、おまけをして生地を裁ってくれ。」というニュアンスを伝えることができる。一

方、図4のイントネーションを用いると、「かなり長い尺で生地を裁ってくれ」というニュアンスを伝えることができる。

- (118) a. *naa]-na-i-duru.*  
 RED-長い-ADJZ-STAT  
 「少し長い。」
- b. *naa]-na-i-duru.*  
 RED-長い-ADJZ-STAT  
 「かなり長い。」

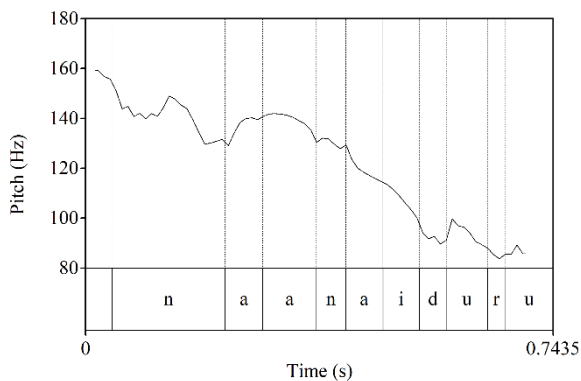


図3 「少し長い (118a)」のピッチ

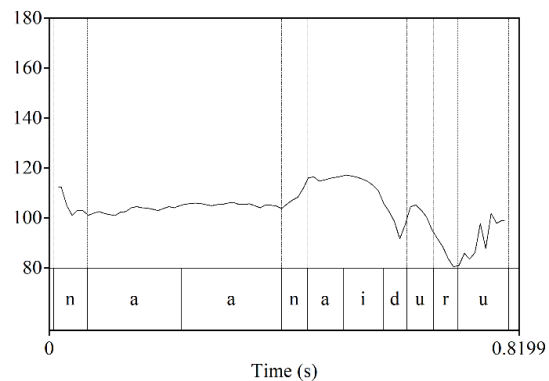


図4 「かなり長い (118b)」のピッチ

## 6. 連体詞, 副詞, 感動詞

### 6.1 連体詞

「大きな」に相当する語として *magi* がある。(119) のように、名詞を直接修飾する。形容詞「大きい」は *maihe-N* (大きい) であり、×*magihe-N* はない。よって、*magi* は連体詞であると考えられる。ちなみに、(119) に見られる *guma φutu* (小さい人) は、形容詞 *gumaha-N* (小さい) があり、*guma* は形容詞の語根で名詞修飾できる用法があると言える。(120) も *jana* (根性悪な) は連体詞であると考えられる。似た意味での形容詞として、*janehe-N* (汚い, 汚れている) があるが、形容詞の×*janaha-N* はない。

その他、連体詞として、(121) の *unu* のような、指示詞の *kunu*, *unu*, *kanu* もある。

- (119) *magi φutu=N gumā φutu=N hikookiciN=ja junu munu.*  
 大きな 人=ADD 小さい 人=ADD 飛行機賃=TOP 同じ 物  
 「大きな人も小さい人も飛行機運賃は同じだ。」

- (120) *jana usI juN=na.*  
 悪い 牛 COP=SFP  
 「性格がよくない牛だなあ。」

- (121) *unu* *φukuru=gee* *irir-ja*.  
 この 袋=ALL 入れる-IMP  
 「この袋へ入れろ。」

## 6.2 副詞

副詞の例を、状態の副詞と程度の副詞と呼応の副詞に分けて表示する（表 28）。*dugu* は、否定を表す語と呼応し「あまり～（ない）」の意味となる。

表 28 副詞の例

|    |       |                          |    |         |                 |
|----|-------|--------------------------|----|---------|-----------------|
| 状態 | ゆっくり  | <i>misikooma</i>         | 程度 | とても     | <i>Nzjatto</i>  |
|    | ゆっくり  | <i>jaraamana</i>         |    | たくさん    | <i>siipai</i>   |
|    | 本当に   | <i>zjuNni</i>            |    | 全部      | <i>muuru</i>    |
|    | 一緒に   | <i>maazoN</i>            |    | 少し      | <i>Nmeema</i>   |
|    | 思いがけず | <i>misii misi</i>        |    | 大変      | <i>sikaittu</i> |
|    | いつも   | <i>caa</i>               |    | これだけ    | <i>tsuNtu</i>   |
|    | 急に    | <i>atautsu/atautsuni</i> | 呼応 | あまり（ない） | <i>dugu</i>     |
|    | 本当に   | <i>maada</i>             |    | きっと     | <i>jadiN</i>    |
|    | たまた   | <i>pItugeNna</i>         |    | もし      | <i>musIN</i>    |
|    | まだ    | <i>meeda</i>             |    | どうか     | <i>doodiN</i>   |

また、オノマトペは、通常、2回の繰り返しで用いられる（表 29）。強調したい場合に、擬音語では、(122) のように3回まで繰り返すことが可能な語もある。しかし、擬態語の場合は、*goφu-ti*（ばったりと）のように繰り返せない。

表 29 オノマトペの例

| 状況          | 共通語例   | オノマトペ形式               |
|-------------|--------|-----------------------|
| 雨の音         | ざーざー   | <i>zooru+zooru-di</i> |
| 一気に水を流す     | ざーっと   | <i>zooru+zooru-di</i> |
| 大雨のときの雨の音   | ざーざー   | <i>dooru+dooru-di</i> |
| 田などぬかるみにはまる | ずぶりと   | <i>daφu+daφu-di</i>   |
| 思いがけず知人に会う  | ばったり   | <i>goφu-ti</i>        |
| 雑草が生えてくる様子  | によきによき | <i>coN+coN-di</i>     |

- (122) *zooru zooru zooru-di* *φu-i=soo*.  
 ザー ザー ザー-QUOT 降る-INF=SFP

「ザーザーザーと降っているよ。」

### 6.3 感動詞

感動詞の例をあげる（表 30）。ここでの感動詞とは、応答と呼びかけと感情を表す語と挨拶表現とする。挨拶表現での一つ一つの語は感動詞ではないが、慣用的にひとまとまりで使用されるため、ここに記載することとした。

まず、応答であるが、肯定の返事として、同等者以下には NN を用いる。先輩への返事には、oo と uu があるが、oo は先輩一般への返事で、uu は最上位者の長老に対する、改まった返事となる。否定は、aai のみで区別はない。また、応答で特徴的な事象は、(123) のように、否定疑問文の形式で「お前は知らないのか」と尋ねられたとき、「はい、知りません」ではなく、「いいえ、知りません」と、否定の aai（いいえ）が使用できる点である。ちなみに、NN（うん）で答えることはできる。NN（うん）だと軽い否定になるが、aai（いいえ）だと、「全く知らない」という強い否定を表す。また、(124) の eeperaN / epperaN（おや、まあ）は昔、年配の女性がよく使用していたが、最近は聞くことがないという。代わりに最近は agajaa（おや、まあ）を用いる。

- (123) *waa bagar-a-nu?*                      {aai/NN}                      *bagar-a-nu.*  
 お前 分かる-THM-NEG                      {いいえ/うん} 分かる-THM-NEG  
 「お前、知らないの？」                      「{いいえ /うん}。知らないよ。」

- (124) *eeperaN. noo=ba=du hi-i.*  
 おや、まあ。 何=ACC=FOC する-INF  
 「おや、まあ。どうしたの。」

表 30 感動詞（(古) は、話者にとって古いと感じられる語である）

|      | 共通語訳    | 感動詞形式            |          | 共通語訳          | 感動詞形式            |
|------|---------|------------------|----------|---------------|------------------|
| 応答   | うん      | NN(同輩以下)         | 感情       | おっと           | ibi              |
|      | はい      | oo (先輩), uu (長老) |          | あらあらまあ        | ibibi            |
|      | いいえ     | aai              |          | おやまあ          | eperaN / eeperaN |
| 呼びかけ | ほら      | uri              |          | ああ(悪いとき)      | issi             |
|      | あらまあ    | agajaa           |          | ああ残念だ         | okkoree (古)      |
|      | よし/ほら今だ | too / too nama   |          | べえーだ          | aka-hucu (古)     |
| 挨拶   | ほら/おい!  | jaa (親しい仲や後輩へ)   | いらっしやいませ | oori taboori  |                  |
|      | さあ      | di /di di /dikka | ごめんください  | kujooma naara |                  |
|      | ほらほら    | ai ai            | 失礼しました   | buri=ba nar-i |                  |

挨拶表現では、「おはようございます」や「こんにちは」や「こんばんは」に相当する語がない。「ごめんください」や「失礼しました」に相当する言い方はあるが、これらは大人の言葉であり、子供は使用しなかったという。共通語で「ごめんください」は、どこの家を訪問する場合にも使用できるが、*kujooma naara* (ごめんください) は、話し手より上位者の家を訪問するときにも用いる。下位者の家を訪問するときは、この語を使用せず、(125) のように言うことになる。直訳すると「誰かいらっしゃいますか」となるが、これが「ごめんください」相当の挨拶表現である。

(125) *taru-Ngasa oor-uN?*

誰-INDF いらっしゃる-NPST

「ごめんください (誰かいらっしゃいますか) 。」

## 7. 疑問詞

疑問詞と不定詞の例をあげる (表 31)。

表 31 疑問詞と不定詞 (該当する形式がない場合は一で表す)

| 疑問詞    |                        | 不定詞  |                            |
|--------|------------------------|------|----------------------------|
| 誰      | <i>taru/taa</i>        | 誰か   | <i>taru-Ngasa</i>          |
| 誰の     | <i>taa</i>             |      | —                          |
| 誰 (複数) | <i>tarutaru/tattaN</i> |      | —                          |
| 何      | <i>noo</i>             | 何か   | <i>noo-Ngasa</i>           |
| どう     | <i>noobai</i>          |      | —                          |
| どんな    | <i>noobairu</i>        |      | —                          |
| どの     | <i>zunu</i>            |      | —                          |
| どっち    | <i>zuri</i>            | どっちか | <i>zuri-Ngasa</i>          |
| どこ     | <i>zuma</i>            | どこか  | <i>zu-Ngasa/zuma-Ngasa</i> |
| いくら    | <i>ikoobi</i>          |      | —                          |
| いくつ    | <i>iφutsu</i>          |      | —                          |
| なぜ     | <i>noo-di</i>          |      | —                          |
| いつ     | <i>itsu</i>            | いつか  | <i>itsu-Ngasa</i>          |

通常、焦点助詞の *du* があれば、文末は連体形になるが、疑問詞疑問文の場合は、(126) のように文末が已然形になる場合が多い。連体形 *φu-u* でも使えないことはないが、意味が異なると言われる。連体形 *φu-u* を用いると「漠然と何かをする」ことを表すのに対し、已然形 *h-jaa* を用いると、することは決定していて、「何から行動をするのか」という「行動の内容」に焦点が絞られるという。疑問詞疑問文では「何」「どう」「誰」など、疑問詞の内容が焦点化される。その際、



動作は完遂することが前提となっているのではないだろうか。そのために、完了のAspect機能がある已然形を選択しているのではないかと考える。

(126) *waa noo=du {φu-u/h-jaa}?*

お前 何=FOC {する-ADNM/ する-RLS}

「お前は何をするか？」

不定詞の接尾辞として-Ngasaを用いる。例えば、「誰か(来たのか)」では, *taru-Ngasa*を用いる。一見, -Ngasaは不定の「か」に相当するように見えるが, -Ngasaが後接できる疑問詞は少ない。生産的に不定詞が作れない。-Ngasaの用法を調査すると, (127)のように「(あの出来事は)いつだったかな」という場合に, *itsu-Ngasa*が使用できる。しかし, 共通語では「×いつかだったかな」とは言えない。この場合, *itsu-Ngasa*は, 「いつのあたりだったか」という意味になるという。よって-Ngasaは, 前接名詞の「周辺」を表す接辞だと考える。例えば, 「いくらか, 貸して」の場合, 前接の *ikoobi* (いくら)は具体的な値が取れないため, -Ngasaでその周辺を指すことができず, ×*ikoobi-Ngasa*と言えないのではないかと考える。

(127) *itsu-Ngasa dat-ta<sup>31</sup>=kaja.*

いつ-INDF COP-PST=SFP

「(あの出来事は)いつだったかな。」

## 8. 焦点助詞など

焦点助詞は *du* を用いる。先行研究として下地 (2010) や Davis (2013) があり, 参考になる。いわゆる係り結びの機能があるのか, 今後も検討が必要であるが, *du* でマークされる語に焦点が当たるのは確かである。例えば, (128) は「誰」を焦点化していると考えられる。

(128) *taroo=nu toorir-u-ka taa=du miir-u=kaja.*

太郎=NOM 倒れる-THM-COND 誰.NOM=FOC 見る-ADNM=SFP

「太郎が倒れたら誰がゾ(面倒を)見るかな。」

また, とりたて助詞として, (129) のように「殿様になり」の「に」に *ba* を用いることがある(宮良婦人会編 2012『桃太郎』の話)<sup>32</sup>。予想外のことが生じた場合に *ba* が使用できる。「～になる」の二格相当は, φ格か *gee* 格が用いられる。φ格や *gee* 格を用いる場合には, 強調の意味はない。よって, 「～になる」の二格相当で用いられる=*ba* はとりたて性を持っていると考えられる。

<sup>31</sup> 前述したように, *dat-ta* は, D氏とE氏が用いる。方言形としては *jat-ta* となるべきである。

<sup>32</sup> 本文は平仮名で書かれている。

- (129) *kuni=nu tonosama=ba nar-i*….  
 国=GEN 殿様=φ=FOC なる-SEQ  
 「国の殿様になり， …」

副助詞としては，表 32 ような語がある。程度を表す=s(j)uku は，最大限の程度でも最低限の程度でも表すことができる。副助詞の機能としては，まだ調査が進んでいないため，本稿では，現時点で確認できた形式のみをあげる。

表 32 副助詞一覧

| 機能 | 共通語訳    | 形態素       |
|----|---------|-----------|
| 程度 | ほど (程度) | =s(j)uku  |
| 類推 | さえ      | =NtsaN    |
| 近似 | ぐらい     | =bagara   |
| 例示 | など，なんか  | =naata    |
| 配分 | ずつ      | =na       |
| 主題 | は       | =ja       |
| 添加 | も       | =N        |
| 不定 | か       | =ju       |
| 曖昧 | ぐらい     | =ataru    |
| 限定 | だけ      | =taNga    |
| 限定 | だけ      | =oobi     |
| 範囲 | まで      | =madi     |
| 比況 | ように     | =taana(a) |

## 9. 節末に現れる詞

### 9.1 接続助詞

後ろに節が続くことができる語を接続助詞相当語と考え，厳密には助詞ではないが，節末に現れる語句を含むこととした (表 33)。今後の検討課題の一つである。

=sooni と=sootaanaa は，(130) のように，動詞の連用形 2 にどちらも後接でき，様態を表す用法がある。現時点ではどのような区別があるのか不明である。(130a) 「猫が歩くように」のように，例示を表す場合は=sooniの方が用いられやすい傾向はある。また，=sooni と=sootaanaa は，(130b) のように前接に過去形式を取ることもできる。

接続助詞は，もともと，語や別の助詞であったものが，転用されているのではないかと考えられる例が多い。例えば，(131) では名詞の *munu* (物) であるが，従属節末に使用されると，逆接

の意味を帯びるようになる。さらに、文末で *munu* を用いると、「～なのに。」と残念な気持ちを表すことができ、終助詞としての機能も帯びるようになる。

- (130) a. *majaa=nu arag-i {=sooni/=sootaanaa}* *hanako=N arag-i-rja-N=na.*  
 猫=NOM 歩く-SEQ=SEEM 花子=ADD 歩く-THM-PROG.RLS-DEF=SFP  
 「猫が歩くように、花子も歩いているね。」
- b. *taroo=nu uki-da {=sooni/=sootaanaa}* *wanu=N uki-da=dara=na.*  
 太郎=NOM 起きる-PST=SEEM あなた=ADD 起きる-PST=SFP=SFP  
 「太郎が起きたように、あなたも起きたね。」
- (131) *mir-uN=di umu-i-da=munu noodi muduh-oor-ja.*  
 見る-NPST=QUOT 思う-THM-PROG.PST=AC どうして 戻す-HON-RLS  
 「(レンタルビデオを) 見ようと思っていたのに、どうして返却なさるのですか。」

表 33 接続助詞, 接続助詞相当語

| 機能    | 共通語訳  | 前接形式     | 接続助詞                  |
|-------|-------|----------|-----------------------|
| 様態・推量 | ように   | 連用形 2/過去 | =sooni                |
| 様態・推量 | みたい   | 連用形 2/過去 | =sootaanaa            |
| 目的    | ように   | 連体形      | -joNbai               |
| 逆接    | けど    | 連用形 2/過去 | =soNga                |
| 確定逆接  | のに    | 連体形/終止形  | munu                  |
| 引用    | と     | 終止形      | =di                   |
| 時     | ころ    | 終止形      | keN                   |
| 順接    | て     | 連用形 2    | -te                   |
| 打消順接  | ～ないで  | 未然形      | -{anu/unu}=s(j)uku(N) |
| 仮定逆接  | であつても | 体言       | jar-abaN              |
| 仮定逆接  | であつても | 体言       | =tuN (古)              |

## 9.2 終助詞

終助詞の形式と機能をまとめた(表 34)。それぞれの機能に関しては、まだ不明な点が多く、今後の課題である。談話で出てきた用例や、話者が作成した文を以下にあげる。今後、表 34 以外にも新しい語が出てくる可能性は高い。また、終助詞は、二つの形式を組み合わせると一つの形式と考える方がよいか、一つの形式ずつ考える方がよいかという問題点もある。この点も、今後の課題としたい。

(133) について説明を付け加える。強変化動詞では、*kak-a* (書こう) のように、語幹と語幹形成母音-a のみで文終止ができるが、弱変化動詞では、それができない。語幹形成母音-u を用いた

後, =Nba が必要となる。強変化動詞では屈折形式のみで意志を表せるので, 弱変化動詞の場合に, なぜ, =Nba が必要になるのか不明である。また, (153) の juu はイントネーションを上げるので, ↑で示した。

表 34 終助詞の機能と形式

| 主な機能                | 終助詞   |
|---------------------|---|
| 話し手の動作への聞き手の同意を求める。 | 未然形=i                                       |
| 聞き手へ同調する。           | 未然形=Nba                                     |
| 話し手の気づきや判断を表す。      | =dara, =joo, =ga(a), =wa, =soo, =ju, =na    |
| 聞き手へ同意を求める。         | =na(a), =sa, =baNna, =soo=ja, =soonaa, =waa |
| 聞き手への同意を表す。         | =jo(o)=naa, =na(a)                          |
| 疑問文や不定句と関係する。       | =kaja, =ka, =na                             |
| 聞き手へ主張する。ときに非難を表す。  | =caa  |
| 聞き手への敬意を表す。         | =juu ↑                                      |

(132) kak-a=i?

書く-INT=SFP

「(あなたの名前も私が) 書くよ。(いいよね? という気持ちを表す)」

(133) banu=N uk-u=Nba. ×uk-u

私=ADD 起きる-INT=SFP

「私も起きようかね。(相手が起きるので, 同調して言う)」

(134) sItag-i gurukkas-I-ta=dara.

たたく-SEQ ひっくり返す-THM-PST=SFP

「(昔は男の子の遊びとしてメンコを) たたいてひっくり返したよ。」

(135) jamadu=nu juu=gee=du par-i-ru=di=joo.

大和=GEN 世=ALL=FOC 行く-PROG-NPST=QUOT=SFP

「(修学旅行で) 大和の土地まで行っているってよ。」

(136) saitaru=gaa. mee.

いんちき=SFP もう

「いんちきだよ。もう。」

(137) meNko=di iz-u=ga.

メンコ=QUOT 言う-ADNM=SFP

「(パッチン遊びの共通語名称を, やっと思い出した) メンコって言うよ。」

(138) X+accee=nu ut-ta=soo.

X+じいさん=NOM いる-PST=SFP

「X じいさんがいたよ。」

- (139) *baarai=ju muc-i pat-ta=naa=di umu-i-ru=ju.*  
 笑い=ACC2 持つ-SEQ 行く-PST=SFP=QUOT 思う-THM-PROG.NPST=SFP  
 「(あの世への土産話として旅行での) 笑いを持っていけるなと思っているよ。」
- (140)=(139)) *baarai=ju muc-i pat-ta=naa=di umu-i-ru=ju.*  
 笑い=ACC2 持つ-SEQ 行く-PST=SFP=QUOT 思う-THM-PROG.NPST=SFP  
 「(あの世への土産話として旅行での) 笑いを持っていけるなと思っているよ。」
- (141) *sItu nat-ta=na.*  
 土産 なる-PST=SFP  
 「(旅行での思い出はあの世への) 土産になったよね。」
- (142) *miiduN takarehee-da=sa.*  
 女性 多い-PST=SFP  
 「(旅行に参加したのは) 女性が多かったよ。」
- (143) *pacciN mir-ar-a-N=baNna.*  
 パッチン 見る-POT-THM-NEG=SFP  
 「(最近, 遊びとして) パッチンを見られないよね。」
- (144) *baga damune=N at-ta=soo=ja.*  
 私達 ダムネ=ADD ある-PST=SFP=SFP  
 「私達, ダムネ(ビー玉) もあったよね。」
- (145) *meema hi-i=te=du mar-i=soona.*  
 少し する-SEQ=CP=FOC 生まれる-INF=SFP  
 「(戦争が終わって) 少ししてから (私達は) 生まれたよね。」
- (146) *saittaru=waa.*  
 いんちき=SFP  
 「(それは) いんちきだね。」
- (147) *aNziki=joo=naa.*  
 そうだ=SFP=SFP  
 「そうだよね。」
- (148) *aNziki juN=na.*  
 そうだ COP=SFP  
 「そうだね。」
- (149) *rjokoo=nu hanasI sIk-ah-a-ba=ka waa sik-i hiir-jaa=ka.*  
 旅行=GEN 話 聞く-CAUS-THM-COND=CNF あなた 聞く-SEQ くれる-RLS=SFP  
 「旅行の話をお聞かせたら, お前は聞いてくれ (きちんとね)。」
- (150) *uri=Ndu jukuNnu sItu ar-a-nu=kaja=di umu-i-ru.*  
 これ=NOM.FOC さらに 土産 COP-THM-NEG=SFP=QUOT 思う-THM-PROG.NPST  
 「これがもっとよい土産になるのではないかとかと思っている。」

- (151) *bigiduN=nu iputaaru dat-ta=na. mee.*  
 男性=NOM 何人 COP-PST=SFP もう  
 「(旅行に行った) 男性は何人だったか。もう。」
- (152) *majaa=caa. noodi waa iN=di iz-jaa.*  
 猫=SFP どうして お前 犬=QUOT 言う-RLS  
 「猫だってば。どうしてお前は犬っていうのか。」
- (153) *miihai=juu* ↑. (目上の人への挨拶言葉)  
 三拜=SFP  
 「ありがとうございます。」

### グロス一覧

|      |                      |      |      |                         |        |
|------|----------------------|------|------|-------------------------|--------|
| ABL  | ablative             | 奪格   | LCTN | low certainty           | 推測     |
| AC   | adversal conjunction | 逆接   | LMT  | limitative              | 限界     |
| ACC  | accusative           | 対格   | LOC  | locative                | 場所格    |
| ADD  | additive             | 添加   | NEG  | negative                | 否定     |
| ADJZ | adjectivizer         | 形容詞化 | NMLZ | nominalizer             | 名詞化    |
| ADNM | adnominal            | 連体   | NOM  | nominative              | 主格     |
| ALL  | allative             | 向格   | NPST | nonpast                 | 非過去    |
| CAUS | causative            | 使役   | PASS | passive                 | 受身     |
| CNF  | confirmative clitic  | 間投助詞 | PFV  | perfective              | 完了     |
| COM  | comitative           | 共格   | POT  | potential               | 可能     |
| COND | conditional          | 条件   | PST  | past                    | 過去     |
| COP  | copula               | コピュラ | PROG | progressive             | 進行     |
| CP   | conjunctive particle | 接続助詞 | QUOT | quotative               | 引用     |
| CSL  | causal               | 理由   | RED  | reduplication           | 重複     |
| DAT  | dative               | 与格   | REP  | reportative             | 伝聞     |
| DEF  | definitive           | 確定   | RESL | resultive               | 結果     |
| DIM  | diminutive           | 指小辞  | RLS  | realis                  | 現実     |
| EXCL | exclusive            | 除外   | ROOT | root                    | 語根     |
| FOC  | focus                | 焦点   | SEEM | seeming                 | 様態     |
| GEN  | genitive             | 属格   | SEQ  | sequential              | 継起     |
| HON  | honorific            | 尊敬   | SFP  | sentence final particle | 終助詞    |
| HOR  | hortative            | 勧誘   | STAT | stative                 | 状態     |
| IMP  | imperative           | 命令   | STEM | stem                    | 語幹     |
| INCL | inclusive            | 包括   | TERM | terminative             | 限界格    |
| INDF | indifinit            | 不定   | THM  | thematic vowel          | 語幹形成母音 |

|      |              |    |     |       |      |
|------|--------------|----|-----|-------|------|
| INF  | infinitive   | 連用 | TOP | topic | 主題   |
| INFR | inferential  | 推定 | -   |       | 接辞境界 |
| INST | instrumental | 具格 | =   |       | 接語境界 |
| INT  | intentional  | 意志 | +   |       | 複合境界 |

## 参考文献

- 新垣公弥子 (2000) 「沖縄県石垣市宮良方言の活用体系」『千葉大学日本文化論叢』1 (旧『語文論叢』27) : 108-96.
- 五十嵐陽介 (2016) 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150: 33-57.
- 伊豆山敦子 (1992) 「琉球方言の1人称代名詞」『国語学』171: 124-106.
- 伊豆山敦子 (1996) 「琉球方言の母音調和的傾向」『獨協大学教養諸学研究』31(1): 1-13.
- 伊豆山敦子 (1997a) 「琉球・石垣宮良方言の動詞語形変化」『獨協大学教養諸学研究』31(2): 1-26.
- 伊豆山敦子 (1997b) 「琉球方言形容詞成立の史的研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』54: 1-31.
- 伊豆山敦子 (1998) 「琉球方言補助動詞(コプラ)の起源」『獨協大学諸学研究』1(2): 77-105.
- 伊豆山敦子 (1999a) 「八重山・宮良方言動詞言い切りの形と意味・用法ー琉球方言のテンス・アスペクト・モダリティー研究のためにー」『獨協大学諸学研究』2(2): 111-133.
- 伊豆山敦子 (1999b) 「琉球方言動詞言い切り形の比較研究ー動詞成立史研究のためにー」『マテシス・ユニヴェルサリス』1(1): 185-221.
- 伊豆山敦子 (2000) 「琉球・八重山・石垣(宮良)方言の動詞言い切りの形」『アジア・アフリカ文法研究』29: 65-91.
- 伊豆山敦子 (2001a) 「琉球・八重山(石垣宮良)方言条件表現とアスペクト・モダリティー的側面」『マテシス・ユニヴェルサリス』2(2): 1-26.
- 伊豆山敦子 (2001b) 「八重山(石垣宮良)方言の「過去」をめぐる問題点」『マテシス・ユニヴェルサリス』3(1): 69-91.
- 伊豆山敦子 (2002a) 「琉球・八重山(石垣宮良)方言の文法」『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究』(1)「環太平洋の言語」成果報告書 A4-004: 343-459.
- 伊豆山敦子 (2002b) 「琉球・八重山方言における「行為の認知」と「行為の結果」」『マテシス・ユニヴェルサリス』4(1): 111-122.
- 伊豆山敦子 (2004a) 「琉球語と日本語」『マテシス・ユニヴェルサリス』5(2): 75-91.
- 伊豆山敦子 (2004b) 「上代日本語と琉球・八重山方言ー動詞活用形の対応を中心にー」『マテシス・ユニヴェルサリス』6(1): 39-63.
- 伊豆山敦子 (2005) 「エヴィデンシャリティ(証拠様態)ー琉球・先島方言の場合ー」『日本語学』24(14): 56-66 明治書院.
- 荻野千砂子 (2011) 「八重山地方の授受動詞タボールンと中世語「給はる」: 敬意優先の授受動詞体系」『日本語の研究』7(4): 39-54.

- 荻野千砂子 (2015) 「南琉球八重山地方石垣宮良方言の指示代名詞」『日本語学会 2015 年度秋季大会予稿集』 25-32.
- 荻野千砂子 (2017) 「形容詞の語幹重複用法の意味－八重山地方の黒島方言と宮良方言－」第 272 回筑紫日本語研究会 口頭発表.
- 荻野千砂子 (2018) 「南琉球石垣市宮良方言の ujoohuN: 一視点がない授受動詞の謙讓語－」『日本語の研究』 14(4): 14-30.
- 荻野千砂子 (2019) 「自敬の許容範囲－南琉球八重山石垣宮良方言－」第 23 回東アジア日本語教育・日本文化研究学会 国際学術大会 口頭発表.
- 荻野千砂子 (2020a) 「黒島方言と宮良方言の親族語彙－次子を表す「なか」のアクセント小考を含む－」第 283 回筑紫日本語研究会 口頭発表.
- 荻野千砂子 (2020b) 「南琉球石垣宮良方言のタボールン系語彙の主語」『坂口至教授退職記念 日本語論集』: 127-148.
- 荻野千砂子 (2021) 「南琉球黒島方言と宮良方言の親族名称と呼称」『語文研究』 (130・131): 483-470.
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』 金田一春彦 (2005) 『金田一春彦著作集』 第七卷所収. 玉川大学出版部.
- 下地賀代子 (2010) 「石垣・宮良方言の係助辞 *-du* の文法的意味役割」『日本語文法』 10(2): 143-159.
- セリック, ケナン・麻生玲子・中澤光平 (2021) 「南琉球八重山語宮良方言のアクセント体系に関する初期報告」『日本語学会 2021 年度春季大会予稿集』 163-168.
- Davis, Christopher (2013) 「琉球・八重山語宮良方言の焦点化辞「*du*」の焦点範疇と文法的分布」*International journal of Okinawan studies*, 4 (1): 29-49.
- Davis, Christopher (2014) 「沖縄県宮良方言」石原昌英 (編) 『文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究 (八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言) 報告書』: 93-101. 琉球大学国際沖縄研究所
- Davis, Christopher (2015) 「八重山語宮良方言の動詞屈折論」狩俣繁久 (編) 『琉球諸語 記述文法』 I: 120-139.
- Davis, Christopher (2016) 「八重山語・宮良方言の音素目録と定動詞屈折形態論」狩俣繁久 (編) 『琉球諸語 記述文法』 II: 172-190.
- Davis, Christopher (2017) 「八重山語・宮良言葉: 記述文法と学習資料に向けた形容詞の記述」石原昌英 (編) 『文化庁委託事業報告書 平成 28 年度 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』: 137-144. 琉球大学国際沖縄研究所
- 當山奈那 (2013) 「沖縄県首里方言における使役文の意味構造」『日本語文法』 13(2): 105-121.
- ペラール, トマ (2016) 「日琉祖語の分岐年代」田窪行則・ジョン, ホイットマン・平子達也 (編) 『琉球諸語と古代日本語』 6 章: 99-124. くろしお出版
- 仲原穰 (2003) 「石垣島宮良方言の音韻研究序説」『琉球の方言』 27: 139-157.



- 仲原穰 (2005) 「小浜方言と宮良方言の音韻の比較研究」『琉球の方言』 29: 107-120.
- 服部四郎 (1979) 「日本祖語について」 21, 22 『月刊言語』 8(11): 97-107, 8(12): 504-516.
- 平山輝男 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』 明治書院.
- 松森晶子 (2010) 「多良間島の3型アクセントと「系列別語彙」」上野善道 (監修) 『日本語研究の12章』: 490-503. 明治書院
- 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系: その韻律単位に関する考察」『日本女子大学紀要.文学部』 64: 55-92.
- 松森晶子 (2016) 「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み: その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件」『言語研究』 150: 59-85.
- 宮良村誌編集委員会編 (1986) 『宮良村誌』 宮良公民館.
- 宮良婦人会編 (2012) 『<sup>たから</sup>宝<sup>しまむら</sup>ぬ島言葉』 宮良婦人会.
- 八重山歴史編集委員会編 (1954) 『八重山歴史』 八重山歴史編集委員会.
- ローレンス, ウェイン (2000) 「八重山方言の区画について」石垣繁 (編) 『宮良當壮記念論集』: 547-559.